

中有と追善

——宮澤賢治「ひかりの素足」論——

工藤哲夫

(以下の注の記号・番号の内、アルファベットは内容に関する補注、アラビア数字は出典注を表わす。)

一 「うすあかりの国」

1 地獄か餓鬼か

「ひかりの素足」は地獄(1)に仏の物語である。(、点工藤、以下同様)。伊藤雅子は、論文「光のすあしは誰か」の冒頭にこう記した。「うすあかりの国」が地獄であるという見解は、通説であると言つてよからう。(a)

ところが、「うすあかりの国」が地獄だとすると、次のような疑問が生ずる。「なんにも悪いことがない」(3)（「何も悪いことをしていない」）ように思われる一郎と樞夫が、何故に地獄に落ちなければならなかったのか。成程、鬼が、「罪はこんどばかりではないぞ」、「みんなきさまたちの出かしたこつた」と、理由を説明してはいる。(b)しかし、鬼

は、一般論を述べただけであって、一郎達の過去世の罪状を具体的に指摘してはいない。もし作者が、「人は今生で何も悪いことをしていなくても過去世の罪で地獄に墮ちることがある」ということを強調したいのなら、一郎達の過去世の罪状を縷述した筈ではなからうか。又、鬼の言葉は、「へ過去世の罪の報いへ自業自得」ということを示しているが、それがそのままここが地獄であるという証拠になるわけではない。

西山令子は、次のように、「うすあかりの国」が地獄であるという証拠を挙げた。

その地獄の様相は日蓮の地獄観と重なる点が多い。「頭謗法鈔」の「第一等活地獄者……獄卒……頭より足にいたるまで皆打くだく。身体くだけて沙のごとし。或は利刀をもて分分に肉をさく。然ども又よみがへりよみがへりするなり。

……第四叫喚地獄者……獄卒悪声出で……熱鉄の地をはしらしむ。……第八に阿鼻地獄者……此の地獄の香のくさ、を人かぐならば、四天下欲界六天人皆ししなん。」がそれである。「後略」⁽⁷⁾
(ママは西山)

「その地獄の様相は日蓮の地獄観と重なる点が多い」というのは本当だろうか。「鬼のむちがその小さなからだを切るやうに落ちました」とは書かれている。しかし、「獄卒」(は鬼のこととしてもよからうが)が「頭より足にいたるまで皆打くだ」き、その結果「身体くだけて沙のごと」くなるという場面はない。「利刀をもて分分に肉をさく」というのは、「闇の中のいきもの」が「刀の刃のやうに鋭い髪の毛でからだを覆はれて」て「一寸でも動けばすぐからだを切る」という叙述とわずかに似ていなくもないが、「利刀」を揮うのはやはり「獄卒」である点、及び「又よみがへりよみがへりする」描写のない点に於て異なっている。「獄卒」が「熱鉄の地をはしらしむ」という場面は全くない。ないけれど、「地面」が「小さな瑪瑙のかけらのやうなものでできてゐて行くものの足を切る」という叙述と似ているではないか、という意見があるかも知れない。似ている。が、違う。この「違う」という点を重視した

い。「くぐさ」「い」「香」の記述も全くない。

「違つ」という点を重視したい」というのは恣意的ではないかという批判（が起こり得ようからそれ）に対しては、同じ「顯謗法鈔」より地獄の有様の、西山令子の省略していた箇所をも含めた引用を示すことによつて応えた。

「前略」第一ニ等活地獄、者此閻浮提の地の下一千由旬にあり。此地獄は縱廣齊等にして一萬由旬なり。此中の罪人はたがいに害心をいだく。若たまた相見れば犬と狻とのあはるがごとし。各鐵の爪をもて互につかみさく。血肉既に盡ぬれば唯骨のみあり。或は獄卒手に鐵杖を取て頭より足にいたるまで皆打くだく。身體くだけで沙のごとし。或は利刀をもて分分に肉をさく。然れども又よみがへりよみがへりするなり。此地獄の壽命、人間の晝夜五十年をもて第一四王天の一日一夜として四王天の天人の壽命五百歳。四王天の五百歳を此等活地獄の一日一夜として其壽命五百歳なり。「中略」第二に黑繩地獄、者等活地獄の下にあり縱廣は等活地獄の如し。獄卒罪人をとらゐて熱鐵の地にふせ（伏）て熱鐵の繩をもて身にすみうて。熱鐵の斧をもて繩に隨てきりさきけづる。又鋸を以てひく。又左右に大なる鐵の山あり。山の上に鐵の幢を立て鐵の繩をはり。罪人に鐵の山をを、せて繩の上よりわたす繩より落ちてくだだけ。或は鐵のかなは（鑊）に墮し入るに（煮）らる。此苦は上の等活地獄の苦よりも十倍なり。「中略」第三に衆合地獄、者黑繩地獄の下にあり縱廣は上の如し。多々の鐵の山二つづ、に相向へり。牛頭馬頭等の獄卒手に棒を取て罪人を駈て山の間に入らしむ。此の時兩の山迫り來て合せ押す。身體くだけで血流して地にみつ。又種種の苦あり。「中略」第四ニ叫喚地獄、者衆合の下にあり縱廣同前。獄卒惡聲出して弓箭をもて罪人をいる。又鐵の棒を以て頭を打て熱鐵の地をはしらしむ。或は熱鐵のいりだな（煎架）にうちかへしうちかへし此罪人をあぶる。或は口を開てわける銅のゆ（湯）を入れば五臟やけて下より直に出つ。「中略」第

五ニ大叫喚地獄ト者叫喚の下にあり縦廣前に同し。其苦の相、上の四の地獄の諸苦ニ十倍して重くこれをうく。「中略」
六ニ焦熱地獄ト者大叫喚地獄の下にあり縦廣前にをなじ。此地獄に種種の苦あり。若此地獄の豆計りの火を閻浮提にをけ(置)
らんに一時にやけ盡なん。況^キ罪人の身の更なることわたのごとくなるをや。此地獄の人は前の五ツの地獄の火を見^ル事雪
の如し。譬へば人間の火の薪の火よりも鐵銅の火の熱^キが如し。「中略」第七に大焦熱地獄ト者焦熱の下にあり縦廣前の如
し。前の六ツの地獄の一切の諸苦ニ十倍して重く受るなり。「中略」第八に大阿鼻地獄ト者又は無間地獄と申^スなり。欲界の
最底^{イトキマ}大焦熱地獄の下にあり。此地獄は縦廣八萬由旬なり外^{オト}に七重の鐵の城あり。地獄の極苦ハ且^ツ略^レス。前の七大地獄
竝に別處の一切の諸苦を以て一分として。大阿鼻地獄の苦一千倍勝れたり。此地獄の罪人ハ大焦熱地獄の罪人を見^ル事作
化自在天の樂^ミの如し。此地獄の香^カのくさ、を人かぐ^ク嗅^クならば四天下欲界六天の天人皆ししなん。されども出山没山と
申^ス山此地獄の臭^ニ氣^イををさへて人間へ來らせざるなり。故に此世界の者死せずと見へぬ。若佛此地獄の苦を具に說せ給
はば人聽て血をはいて死すべき故に。くわしく佛說^キ給はずとみへたり。「後略」⁽¹¹⁾

こう見て来るならば、「その地獄の様相は日蓮の地獄觀と重なる点が多い」ところか、相違点の方が多いことが理
解されるであろう。何が相違しているのかと言えば、日蓮の述べている「地獄の様相」は、「壽命」の長さという
要素も含めて)その凄まじさの点に於て、「うすあかりの国」の苛酷さの比ではない、ということである。「うすあ
かりの国」は、地獄ではないのではなからうか。

「宮沢賢治がここを地獄と呼ばずに敢えて「うすあかりの国」と称している点に留意した時、筆者はこの国を異
界としての餓鬼界に比定したいと考える」という新見を打出したのが五十嵐茂雄であつた。その結論部分は次の通
りである。

このように考えてゆくと、確かに「うすあかりの国」の描写は地獄的ではあるが、先にあげた冒頭の模倣とした表現、また目連伝説や、冥界という原義を持ち、さらに一種の往還が可能な場所としての冥府たる餓鬼界をこれに相当させるのが妥当のように思われる。言葉を換えれば、上記の内容を包含した死者の国としての異界——罪を背負った苦の世界——を賢治は描いたとすべきであろう。⁽¹⁸⁾

五十嵐茂雄の述べている限りに於て、その説は、妥当性を有するように見える点がないわけではない。しかし、述べていない点についてはどうであろう。「述べていない点」とは何かと言えば、「餓鬼界」の「様相」、これである。「餓鬼界」の「様相」の内、「一種の往還が可能な場所」であるという点以外の点に於ても、「うすあかりの国」と一致しているであろうか。

五十嵐茂雄が言及している「目連伝説」について、目蓮が「孟蘭盆御書」の中で、次のように述べている（なお、「孟蘭盆御書」とは、「撰折御文／僧俗御判」に於て、賢治がその一節を引用している遺文⁽¹⁹⁾であるから、全体を読んだ可能性も高いであろう）。

孟蘭盆と申候事は佛の御弟子の中に目連尊者と申して。舍利弗にならびて智慧第一神通第一と申して。須彌山に日月のならび大王に左右の臣のごとくにをせし人なり。此の人の父をば吉懺師子と申母をば青提女と申す。其母の慳貪の科に^{ぶか}よて餓鬼道に墮ちて候しを目連尊者のすくい給より事をこりて候。其因縁は母は餓鬼道に墮ちてなげき候けれども目連は凡夫なれば知ることなし。幼少にして外道の家に入り四る意陀十八大經と申す外道の一切經をならいつくせども。いまだ其母の生所をしらず。其後十三のとし舍利弗とともに釋迦佛にまいりて御弟子となり。見惑をだん断じて初果聖人と

なり修惑を断じて阿羅漢となりて三明をうなへ六通をへ得給へり。天眼をひらいて三千大千世界を明鏡のかけ影のごとく御らむありしかば。大地をみとを(見透)し三惡道を見る事氷の下に候魚を朝日にむかいて我等がとをしみるがごとし。其中に餓鬼道と申すところに我が母あり。のむ事なし食(食)ことなし。皮はきんてう(金鳥をむし)毛(毛)れるがごとく骨はまろき石をならべたるがごとし。頭(頭)はまり毛(毛)のごとく頸(頸)はいと(絲)のごとし腹は大海のごとし。口をはり手を合せて物をこへ(こ)る形はうへたるひる(熊麿)の人のか(香)をかけるがごとし。先生の子をみてなか(逆)んとするすがたうへたるかたちたとへをとるに及ばず。いかんがかなしかりけん。法勝寺の修(修)行(行)舜(舜)觀(觀)後(後)寬(寬)がいわう(疏黃)の嶋にながされて。は(だ)か(釋)にてかみ(髮)くびつき(頸付)にうちをい。やせ(瘦)をとろへて海へんにやすら(愈)いてもくづ(薄膚)をとりにこし(腰)にまき。魚を(魚)一(一)みつけて右の手にとり口にかみ咬ける時。本(本)つかい(世)しわらわ(僅)のたずねゆきて見し時と。目連尊者(が母を見しといづれかをろか(麤)なるべき。かれはいますこしかなしきわまさりけん。目連尊者はあまりのかなしさに大神通をげん(現)じ給ひはん(麤)をまいらせたりしかば。母よろこびて右の手にはんをにぎり左の手にてはんをかく(陰)して口にし入(入)給(給)しかば。いかんがしたりけんはん變じて火となりやがてもへ(燃)あがり。とうしび(燈心)をあつめて火をつけたるがごとくばともへあがり。母の身の(こ)こ(こ)ことやけ候しを目連見給(目)て。あまりあわて(周章)さわぎ大神通を現じて大なる水をかけ候しかば。其水たきぎ(薪)となりていよいよ母の身のやけ候し事(事)あはれには候しが。其時目連みづからの神通かなわざりしかばはしり(走)かへり。須臾に佛にまいりてなげき(歎)申せしやうは。我が身は外道の家に生(生)て候しが佛の御弟子になりて阿羅漢の身をへ(得)て。三界の生をはなれ三明六通の羅漢とはなりて候へども。乳母の大苦をすくはんとし候にかへりて大苦にあわせて候は。心うしとなげき候しかば。佛け説(説)云(云)汝が母はつみふかし汝一人が力及(及)べからず。又何(い)の(人)なりとも天神地神邪魔外道道士四天王帝釋梵王の力も及(及)べからず。七月十五日に十方の聖僧をあつめて百味をんじき(飲食)をと、(調)へて母のくは(き)わすくうべしと云云。目連佛の仰(仰)せのごとく行(行)ししか

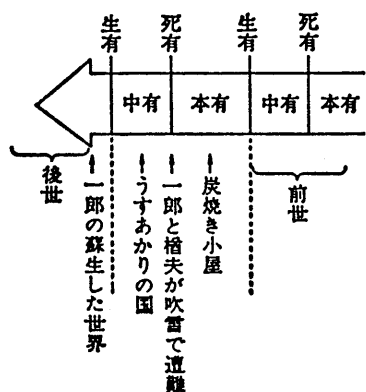
ば其母は餓鬼道一劫の苦を脱れ給^のと。孟蘭盆經と申^ス經にとかれて候。其にて滅後末代の人人は七月十五日に此法を行^ハ候なり。此は常のごとし。〔後略〕⁽²⁰⁾

——線部の状況が、目連の母に限って起きた特殊なケースでなく、餓鬼界の一般的特徴を示しているということ

は、説明する迄もあるまい。^(d)この(母の如く)「常に饑餓に苦む」という状況が、「うすあかりの国」の住人達のごに見られるであろうか。「うすあかりの国」は「餓鬼界」ではないのではないか。

地獄でも餓鬼でもない、第三の解釈を示したのが、田口昭典であった。田口昭典は、平尾隆弘の「境界領域」説を紹介しつつ、次のように述べた。

生命の連続—生と死の繰り返し
(仏教説話大系20巻 すずき出版より)⁽⁶⁾



平尾隆弘⁽⁶⁾の「ひかりの素足」における「うすあかりの国」の位置については、この世と他界(あの世)の境界領域であるとして、「弟樞夫は家出上京した賢治のバトスである。兄一郎は、帰郷するかれの出立意識である」とみて、樞夫があこの世に残り、一郎がこの世に戻ってきたのは、新たな出発のためであるとして、賢治の家出上京と帰郷とを関連づける見方をしている。特に、最近、龍佳花⁽⁷⁾の「うすあかりの国」については、「賢治の生命思想は『中有』の実在を核とする」という見解に立って「青森挽歌論」を展開しているのが注目され、こういう考えは「うすあかりの国」にも適用できる。

いうまでもなく「中有」は、中陰ともいい、人間が死んで次の生を受

けるまでの間のことである。生を生有、死を死有といい、生有と死有の間に位置して、現世と冥途との間が中有で、死後、四十九日間はここに魂が迷っているという。上図にこの関係をまとめてみる。⁽²⁴⁾

(右の文中、「うすあかりの国」については、「」という部分は削除した方がいと思われるが、それはともかく、)要するに、「うすあかりの国」中有説である。ただ、田口昭典の記述の中には、

○ 吹雪の峠で遭難した二人の兄弟が地獄をさまよい、鬼にいためつけられているとき、如来がやってきて救われ、弟を最後までやさしくかばいつづけた功德によって、兄はこの世に生き還り、弟はそのまま留めおかれる。⁽²⁵⁾

○ 兄弟はうすあかりの国で目覚める。作者賢治の意識のうちに、うすあかりの国とは生と死の間、無明の世界であり、薄明の世界である。そこには凄惨な地獄⁽⁸⁾が展開される。賢治が幼いころ見たという地獄絵の反映であろうか。日蓮宗に帰依する以前の浄土真宗の影響とみてよいであろう。

賽の河原とおぼしきところや、鋒^{ほうじん}刃副地獄⁽⁸⁾の刀刃路^{とうじんろ}(刃を上にした剣が並ぶ道を歩かされる)や、劍^{けんろう}葉林(風の吹くたびに木の葉が落ちてくるように剣の刃が落ちてきて手足を切る)、鉄刺^{てつし}林(剣の刃が密生している大樹)などが、これでもかこれでもかとして出てくる。⁽²⁶⁾

(○は工藤)

というように、地獄説の尻尾を引き摺っている箇所がある。それ故であろう、前出の五十嵐茂雄は、右引用文の内「賽の河原と」以下を引いて、田口昭典を地獄説の方に分類しているのである。⁽²⁷⁾

この混乱が何に由来するのかを推測してみるならば——先の、中有説を述べた引用文の箇所は、初出稿⁽²⁸⁾では書かれていなかった。単行本化に当って、(田口昭典が記す通り)龍 佳花の中有説をヒントに、それを「うすあかりの

「国」にも適用⁽²⁹⁾して、先の引用の箇所を「加筆」した際、従来から書いてあつた地獄説とが不整合を来した、ということであらう。

私は、（結論としての）田口昭典の中有説に賛同したい。そして、田口昭典が不徹底であつたところを補つて、中有説に的を絞つて、より深い考察を以下に試みてみたい。

2 中有

考えてみれば、死んですぐに、中有を経ずに地獄や餓鬼（界）に行くと思つたのが、そもそもの間違いであつたのかも知れない。言われてみれば、死後先ず行くところ（状態）は中有であるというのが、理の当然であらう⁽³⁰⁾（尤も、これは童話なんだから、杓子定規に仏教思想を当て嵌める必要はあるまいという反論もあらうが）。前節で、地獄や餓鬼の特征的たるべき「様相」が「うすあかりの国」のそれと合致していないという理由で、地獄・餓鬼説を退けた。今、中有説について「理の当然」という理由を挙げたわけだが、「理の当然」というだけでなく、中有の「様相」と「うすあかりの国」のそれとの類似している点を証拠として以下に示そう。

が、その前に、賢治が中有の有様についての情報を何から得たのかを、確定しておきたい。先に、日蓮「顕謗法鈔」に触れた。そこに描かれている地獄の「様相」が、「うすあかりの国」のそれと一致しないことを示したわけだが、では賢治はこの遺文を読んでいなかったのかと言え、そんなことはない。確実に読んでいたと思われるのである。それが何故分るか。斎藤文一の報告によれば、賢治は所蔵の『日蓮聖人御遺文』（注(1)参照、但し初版）の「高祖遺文録対照目録」の内二箇所に○印を付けているという。その二箇所とは、「十王讚歎鈔」（斎藤文一は「歎」

の字を「難」と誤記（又は誤植）と「顕謗法鈔」である。⁽³²⁾この○印をもって、賢治が「顕謗法鈔」を読んだ証処と見なしたのであるが、読んだにもかかわらず、その地獄の「様相」を「うすあかりの国」の描写に利用しなかったのは何故か。いや、利用したのである。利用しないという形で利用したのである。つまり、「顕謗法鈔」に描かれているような地獄の「様相」と「重な」らないように注意して賢治は、「うすあかりの国」を描いた、と推測したのである。理由は、言う迄もない。賢治は、地獄ではなく中有の有様を書きたかったからだ。ではその中有に関する情報をどこから得たのか。もう一つの○印の付いている「十王讚歎鈔」からである。「十王讚歎鈔」には、まさに中有の状景が縷述されているのである。大胆な推理をなせば、右の二つの印は、賢治が「ひかりの素足」の「三、うすあかりの国」を書く為に用いた二つの参考文献ということを意味するのではなからうか。地獄と中有の状態を区別して認識する為に、地獄について説明したものと、中有そのものについて述べたものと二つを必要としたのではなかつたらうか。^(h)

では、「十王讚歎鈔」と「うすあかりの国」との類似点の検証に移らう。以下引用文に於て☆は「十王讚歎鈔」より、★は「ひかりの素足」よりの引用を表わす。

☆「前略」又莊嚴論に命盡終時^ミ、見テ大黒闇^ニ如ク墮^ル深岸^ニ。獨り逝テ廣野^ニ無シ有^ル伴侶^トと云て。正^ましく魂の去時は目に黒闇^ニを見
て高き處より底へ落入るが如して終^ル。さて死してゆく時唯獨り渺渺たる廣き野原に迷ふ。此を中有の旅と名也。⁽³⁵⁾「後略」

★ けれどもけれどもそんなことはまるで夢のやうでした。いつかつめたい針のやうな雪のこなもなんだかなまぬ
るくなり樞夫もそばに居なくなつて一郎はたゞひとりほんやりくらい藪のやうなところをあるいて居りました。⁽³⁶⁾

一郎は樗夫と一緒に死んだ筈なのに、「うすあかりの国」では、(後に出会うが)「たゞひとり」になって「ほんやりくらしい藪のやうなところをあるいて居」る。☆の「獨り逝_レ廣野_一無_レ有_二伴侶_一」・「唯獨り渺渺たる廣き野原に迷ふ」と似ていないか。「獨り」ということに関しては、「十王讚歎鈔」の別の箇所にも、「一人としてもそはず是非を訪人もなし」・「所従一人もつかずして迷ひ行こそ悲しけれ」・「しらぬ山路に獨り迷ふ」・「聞き道に泣泣獨り行」・「黄泉の旅に出給へば御供一人もなかりけるこそ悲しけれ」とあり、中有に於ける状態の一つの特徴であると思われる。

☆「前略」如_レ此何くを指とも無して行程に途中にして獄卒の迎を見る人もあり。⁽³⁹⁾

★「私たちはどこへ行くんですか。どうしてこんなつらい目にあふんですか。」樗夫はとなりの子にたづねました。「あたしは知らない。痛い。痛いなあ。おっかさん。」その子はぐらぐら頭をふって泣き出しました。

「何を云ってるんだ。みなさままたちの出かしたこつた。どこへ行くあてもあるもんか。」

うしろで鬼が咆えて又鞭をなりました。⁽⁴⁰⁾

「何くを指とも無して行程に」と——線部が対応している。又、地獄でもないのに鬼が出て来ることも、右の記述で領ける。

☆「前略」さても罪人冥冥として足に任せて行程に。我のみ此道に來_ル歟と覺るに。目にはさだかに見_エねども罪人いたみ叫ぶ聲時時耳に聞ゆ。其時胸さわき怖ろしきに又獄卒の聲と覺しきも聞ゆ。こは如何せんと思ふ處に程もなく羅刹の形

を見る。今までは僅かに名をこそ聞つるに今親^{まのあた}り此を見る怖しき云計なし。其後は前後に付そひ息をもくれず責かくれば。〔後略〕⁽⁴⁾

★〔前略〕それでもいつか一郎ははじめにめざしたうすあかるい処に来ては居ました。けれどもそこは決していゝ処ではありませんでした。却って一郎はからだ中凍ったやうに立ちすくんでしまひました。すぐ眼の前は谷のやうになつた窪地でしたがその中を左から右の方へ何ともいへずいたましいなりをした子供らがぞろぞろ追はれて行くのでした。わづかばかりの灰いろのきれをからだにつけた子もあれば小さなマントばかりはだかに着た子もありました。瘠せて青ざめて眼ばかり大きな子、髪の緒の小さな骨の立つた小さな膝を曲げるやうにして走って行く子、みんなからだを前にまげておどおど何かを恐れ横を見るひまもなくたゞふかくため息をついたり声を立てないで泣いたり、ぞろぞろ追はれるやうに走って行くのでした。みんな一郎のやうに足が傷いてゐたのです。そして本たうに恐ろしいことはその子供らの間を顔のまっ赤な大きな人のかたちのものが灰いろの棘のぎざぎざ生えた鎧を着て、髪などはまるで火が燃えてゐるやう、たゞれたやうな赤い眼をして太い鞭を振りながら歩いて行くのでした。その足が地面にあたる時は地面はがりがり鳴りました。一郎はもう恐ろしさに声も出ませんでした。

樞夫ぐらるの髪のちゞれた子が列の中に居ましたがあんまり足が痛むと見えてたうたうよろよろつまづきました。そして倒れさうになつて思はず泣いて

「痛いよう。おつかさん。」と叫んだやうでした。するとすぐ前を歩いて行つたあの恐ろしいものは立ちどまってこつちを振り向きましました。その子はよろよろして恐ろしさに手をあげながらうしろへ逃げやうとしましたら忽ちその恐ろしいものの口がびくつとうごきばつと鞭が鳴つてその子は声もなく倒れてもだえましました。あとから来た子供らはそれを見て

もたゞふらふらと避けて行くだけ一語も云ふものがありませんでした。倒れた子はしばらくもだえてゐましたがそれでもいつかさっきの足の痛みなどは忘れたやうに又よろよろと立ちあがるのでした。

一郎はもう行くにも戻るにも立ちすくんでしまひました。俄かに樞夫が眼を開いて「お父さん。」と高く叫んで泣き出しました。すると丁度下を通りかかった一人のその恐ろしいものはそのゆがんだ赤い眼をこつちに向けました。一郎は息もつまるやうに思ひました。恐ろしいものはむちをあげて下から叫びました。

「そこらで何をしてゐんだ。下りて来い。」

一郎はまるでその赤い眼に吸ひ込まれるやうな気がしてよろよろ二三歩そつちへ行きましたがやつとふみとまつてしつかり樞夫を抱きました。その恐ろしいものは頬をびくびく動かし歯をむき出して咆えるやうに叫んで一郎の方に登つて来ました。そしていつか一郎と樞夫とはつかまれて列の中に入つてゐたのです。ことに一郎のかなしかつたことはどうしたのか樞夫が歩けるやうになつてはだしてその痛い地面をふんで一郎の前をよろよろ歩いてゐることでした。一郎はみんなと一諸に追はれてあるきながら何べんも樞夫の名を低く呼びました。けれども樞夫はもう一郎のことなどは忘れたやうでした。たゞたびたびおびえるやうにうしろに手をあげながら足の痛さによるめきながら一生けん命歩いてゐるのでした。一郎はこの時はじめて自分たちを追つてゐるものは鬼といふものなと、又樞夫などに何の悪いことがあつてこんなつらい目にあふのかといふことを考へました。そのとき樞夫がたうたう一つの赤い稜のある石につまづいて倒れました。鬼のむちがその小さなからだを切るやうに落ちました。一郎はぐるぐるしながらその鬼の手にすがりま

した。⁽⁴²⁾

初めは一人「ひかりの素足」では一郎と樞夫の二人で行く内に、同じ境遇の他の者達に出会う、次いで鬼を見

足を刺す故「歩まれず」なのか定かでないが、——線③と合わせて考えて、今は一応地面のことと受け止めておく（もしこれが地面でないとすれば、——線②を考察の対象から除外しても可）。この地面を、——線④から分るように、はだして歩いて行くわけであるが、一郎達もやはり同じように、悪路をはだして歩いてゆく。そして、足が傷つき痛むのである。その箇所を列挙してみよう。

「足ははだしになってゐて今までもよほど歩いて来たらしく深い傷がついて血がだらだら流れて居りました・「足が灼くやうに傷んで来ました」・「足の痛いのも忘れてはしり出しました」・「泣きながらはだして走つて行つて」・「一郎の足はまるでまっ赤になってしまひました。そしてもう痛いかどうかもわからず血は気味悪く青く光つたのです」・「一郎は樞夫の足を見ました。やっぱりはだしてひどく傷がついて居りました」・「足がたまらなく痛みました」・「一郎は自分の足があんまり痛くてバリバリ白く燃えてるやうなのを」・「一郎は歯を喰ひしばつて痛みをこらへながら」・「みんな一郎のやうに足が傷いてゐたのです」・「あんまり足が痛むと見えて」・「さっきの足の痛み」・「はだしてその痛い地面をふんで」・「足の痛さによろめきながら一生けん命歩いてゐる」・「樞夫がたうたう一つの赤い稜のある石につまづいて倒れました」・「ほかの人たちの傷ついた足や倒れるからだ」・「まったく野原のその辺は小さは瑪瑙のかけらのやうものでできてゐて行くものの足を切るのです」・「痛い。痛いなあ。おつかさん」・「野原の草はだんだん荒くだんだん鋭くなりました」・「足もからだも傷つき」

☆「前略」如_レ此種種の苦を受けて泣_レ泣死出の山路を越過して始めて秦_レ廣王の御前に參る。見れば無量の罪人等種種に禁められて御前に竝_レ居たり。其時大王罪人を御覽して宣_レはく。抑_レ汝等無始より已來幾度此處に來るぞ其數恆沙も譬にあらず。汝知ずや度_レごとに地獄の業盡_レて娑婆に還る時。鐵の棒を以て獄卒三_レ杖後を打。人間に還りなば速かに佛道修行して成佛すべし

重て此惡趣に來る事なかれと勸ろに云含めしに。其驗もなく恣に罪業を造て片時の間に又來るなさせなさまよ。而も娑婆世界は佛法流布の國也。何ぞ佛道修行をなさずして徒らに過て又來るやとのたまふ。〔後略〕⁽⁵⁸⁾

☆〔前略〕五七日閻魔王本地地藏菩薩也。〔中略〕即罪人に宣く汝此に來る事昔より已來幾千萬と云事其數をしらず。娑婆世界にして佛道修行を成し再び此惡處へ來るへからずと毎度云含しに。其驗しもなく又來れる不當さまよ。〔後略〕⁽⁵⁹⁾

情況は、全体としては一郎・樞夫に當て嵌まりそうもないが、——線部は、あの、一郎と樞夫に関する限りでは不可解に思える鬼の言葉、「罪はこんどばかりではないぞ」⁽⁶⁰⁾のヒントぐらいにはなつたかも知れない。

☆〔前略〕二七月初江王本地釋迦如來。此王へ詣る道に一の大河あり是を三途河と名く。〔中略〕又上より大磐石流れ來て罪人の五體を打摧く事微塵の如し。死すれば活かへり活かへれば又摧く。〔後略〕⁽⁶¹⁾

☆〔前略〕六七日變成王本地彌勒菩薩也。此王へ詣る道に一の難處あり鐵丸所と名くる也。遠き事八百里の河原也。此河原大にして丸き石充滿せり。一處にたまらずして互にころびまはり打合音雷の如し毎に石光を出す電に似たり。罪人は是に恐れてゆかじとすれば獄卒後より追立る間。力及ばず走り入れれば此石に當て五體を打くだかれて死す。死すれば又活かへる活かへれば又打摧く。〔後略〕⁽⁶²⁾

★ 樞夫はかすかにかすかに眼をひらくやうにはしましたけれどもその眼には黒い色も見えなかつたのです。一郎はもうあらんかぎりの力を出してそこら中いちめんちらちら白い火になって燃えるやうに思ひながら樞夫を肩にしてさつきめざした方へ走りました。足がうごいてゐるかどうかもわからずからだは何か重い巖に碎かれて青びかりの粉に

なつてちらけるやう何べんも何べんも倒れては又樞夫を抱き起して泣きながらしつかりとか、へ夢のやうに又走り出したのでした。「後略」⁽⁶³⁾

——線部に対応を認めることができよう。⁽ⁱ⁾線部。書かれている事柄は異なっている。が、「反復性」という性質に於て共通する所があり、☆をヒントにした可能性は考えられるだろう。

☆「前略」又岸の上に大なる木あり此は衣領樹いりょうじゆと名く。此上に一の鬼あり懸衣翁けんいおうと名く。又樹の下に一の鬼あり懸衣嫗けんいあひと名く。此鬼罪人の衣裳を剥取て上なる鬼に渡せば即請取て木の枝に此を懸る。されば一切の罪人此木の本に至れば此鬼睨んで衣裳ぬげと責せむ。其時罪人但ひと一重ひとの衣也。定て十王の御前に参るべし争か此を脱ぎ裸にて耻を曝すべき。願くはゆるし給へとて手を合す。「後略」⁽⁶⁶⁾

★ 一郎は自分のからだを見ました。そんなことが前からあったのか、いつかからだには鼠いろのきれが一枚まきついてあるばかりおどろいて足を見ますと足ははだしになってゐて今までもよほど歩いて来たらしく深い傷がついて血がだらだら流れて居りました。それに胸や腹がひどく疲れて今にもからだが二つに折れさうに思はれました。一郎にはかにこわくなって大声に泣きました⁽⁶⁷⁾

「剥取」られる迄は、「罪人」は「但一重の衣」を着ていたことが分る。「一重」というのは、「此を脱」げば「裸」ということから(判断すると)、「一枚」という意味であろう。一郎の体にも、「鼠いろのきれが一枚まきついてあるばかり」であった(作者は、さすがに一郎達を素裸にするのには躊躇をおぼえたのであろう)。

☆〔前略〕我全く惡む心を以て汝を呵責するに非ず。又一罪としても今我加るに非ず。自業自得の報なれば己が心を恨むべしとて。〔後略〕⁽⁶⁸⁾

☆〔前略〕大王つくづくと聞しめて宣く。此後に功德を作事はさこそあらめ。それは其時の沙汰なるべし。今は過にし方の善惡を勸ふる事なれば汝既に犯したる罪業あらんにをいては通るべからず。別儀計とは誰かいはざる者あらんや。其上汝が自業の責るところなれば可_レ許_レ事に非ず。汝が罪業未_レ可_レ盡_レ何ぞ如此_レ諍_レひ申すぞとて。〔後略〕⁽⁶⁹⁾

☆〔前略〕加様の大苦難を經歷して平等王の御前に參る。則大王罪人に宣く。此處に來る事人の導くには非ず己が心から也。〔後略〕⁽⁷⁰⁾

☆〔前略〕不便なれども自業自得の理りなれば力不及。〔後略〕⁽⁷¹⁾

☆〔前略〕其時大王汝今地獄の相を聞てさへ如_レ此れぢれそる。况や地獄の火にも_レ沁_レん事乾たる薪をやく如くならんをや。是火のやくに非ず惡業のやくなり。火の焼はけしつべし惡業の焼はけすべからず。如_レ此_レ重苦を受ん事只汝が心一つより起れり。〔後略〕⁽⁷²⁾

——線部を發想源として、「ひかりの素足」の「みんなきさまたちの出かしたこつた」⁽⁷³⁾・「それはおまへたちが自分で自分を傷つけたのだぞ」⁽⁷⁴⁾の台詞が生まれ出たのではないだろうか。⁽⁷⁵⁾

☆〔前略〕七七日泰山王本地薬師也。此王へ詣る道に一の惡處あり是を閻鐵所と名くる也。遠き事五百里間き事譬へん方な

し。但夜晝のさかひもなし。又其道細くして左右の岸皆鐵の巖也。罪人身を細めて通るに。巖の楞劍かどの如くして少しもさはれば身のし、むら(肉)續きがたし。先へ進んとすれば俄に巖閉合て通られず立留んとすれば巖又開く。「後略」⁽⁷⁷⁾

★ だんだん眼が闇になれて来た時一郎はその中のひろい野原にたくさんの黒いものがちつと座つてゐるのを見ました。微かな青びかりもありました。それらはみなからだ中黒い長い髪の毛で一杯に覆はれてまっ白な手足が少し見えるばかりでした。その中の一つがどういふわけか一寸動いたと思ひますと俄かにからだもちぎれるやうな叫び声をあげてもだえまはりました。そしてまもなくその声もなくなつて一かけの泥のかたまりのやうになつてころがるのを見ました。そしてだんだん眼がなれて来たときその間の中のいきものは刀の刃のやうに鋭い髪の毛でからだを覆はれてゐること一寸でも動けばすぐからだを切ることがわかりました。⁽⁷⁸⁾

——線部の表現が似ていると言えるであろう。

以上、類似点を探つて来たわけだが、右の引例を比較しても分るように、「十王讚歎鈔」と「うすあかりの国」との、全体としての雰囲気は異なつてゐる。(情景)描写の為の、部分的ヒントを得たということであろう。

二 「によらいじゅりやうぼん第十六」

1 追 善

池上雄三は、「によらいじゅりやうぼん第十六」という声「中略」それは誰の声なのか⁽⁷⁹⁾と、問題提起をした。

これについて考えてみよう。

「十王譴歎鈔」を読んで気の付く特徴が二つある。一つは、前章で確認したような、中有の情景である。もう一つは、追善の効用が大変強調されているという事実である。賢治は、これらの特徴を、二つながら読み取って作品に生かしたと推測したのである。

では、追善とはどういうことなのか。それについて述べた箇所を引用してみよう。

☆「前略」其時大王獄卒を召て此罪人早早地獄へ遣すべしと宣へば。罪人餘りの悲しきに泣泣申上る様は。御定の如く我身には助かるべき功德なけれども。娑婆に妻子眷屬も候へば我が爲に追善を致すべく候。願くは其善根を待受申さんほどに大王の御前に召をかれ候へと申せば。大王汝さ思ふらん我れ慈悲を以て且く相待べしと宣ふ。げに中にも此王御慈悲深く在すらん。故は本地釋迦如來にて在せば一子平等の御慈悲なれば助けたくこそ思食らめ。譬は父母の病子を思ふが如くこそ思食らめども。衆生の業力佛力に勝といへば。業因威果の道理必然たれば佛の御慈悲も難叶故に。忝くも大悲の御胸を焦し奉る。我等不信無志の不孝の身となる事悲んども有餘り。されば勸ろに種種の法門を説て萬差の機を調へ。終に出世の本懐の法華經を説給て化一切衆生皆令入佛道なし給き。構構此理を思ひ成佛得道を期せんと思はば時國相應の妙法の唱へをなし以言得入し給べし。而るに信心疎かにして三途に墮して重苦を受ん時悔るとも益なかるべし。譬は網にかゝる鳥の高く飛ざる事を悔が如くなるべし。さても罪人妻子の追善今や今やと待つ處に。追善をこそせざらめ。還て其子共跡の財寶を論じて種種の罪業を致せば罪人彌苦をうく。哀れ娑婆にありし時は妻子の爲にこそ罪業を造て。今かゝるうきめを見るに少しの苦を輕する程の善根をも送らざること恨み限りなし。貯へ置し財寶一だにも今の用にはたゞざりけりと。一方ならぬ悲さに泣きけぶこそ哀れなれ。大王是を御覽じて汝が子供不孝の者も今は力及ばずとて地

獄に墮さる。又追善をなし逆誘救助の妙法を唱へ懸れば成佛する也。然れば大王も歡喜し給ひ罪人も喜ふ事無_レ限。或は又指_さたるとぶらひもなく跡にて罪業をもなさず斷罪不_レ定時は次の王へ破_レ送也。〔後略〕⁽²⁰⁾

追善のない場合は地獄行き（この罪人の場合）であるが、「追善をなし逆誘救助の妙法を唱へ懸れば成佛する」のである。

☆〔前略〕兎角して宗帝王の御前に参り畏_れり。泣泣我身の罪なき由を奏す。其時大王宣く汝奸曲の者也。罪業なくば此道に來るべからず。來ながら過なき由申すとも争か其隠れ有べきや。所詮汝一期の間の造りし罪業をば俱生神悉_レ記_ス之_ヲ。具さに讀て聞すべしとて大王自讀上給。御音大に高して雷の鳴懸るが如し。罪人聞_レ之_ヲ肝神も失ぬ。然るに娑婆にて作りし罪業殺盜姪妄等の四重八重の重惡罪。又人にもしらせず。心中に埋み置處の惡業等一一に毛さき程も隠れなく委細に讀聞せ給へば。罪人は是を承て兎角の言なくして只泪に咽びけるが。今如何してかのがるべきと思て申上る様は。身の罪業は御札の面に隠れなく顯れて候上は争ひ申すべきにあらず。去ながら娑婆に子供もあまた候間其中_ニ若も孝子有て定て善根を可_レ送_ル候。偏に大王の御慈悲にて且_ク御待候へと歎き申せば。大王面には嗔_レり給へども内には御慈悲深き故に。汝が罪業一一に無_レ隱_レ上は地獄に墮すべけれども先_ニ待_レべしと宣ふ。然れば罪人の喜_ハ無_レ限。如_レ此待給に孝子善根をなせば亡者罪人なれども地獄をまぬがる、也。されば大王も追善を隨喜し給て。汝には似ざる子供とて。褒美讚歎し給也。

〔後略〕⁽²¹⁾

追善が奏効して、「地獄をまぬが」れた例である。

☆〔前略〕四七日五官王本地普賢菩薩也。〔中略〕大王宣く。汝能聞娑婆にある妻子勸_レるに訪_レならば。先_ニ先_ノの王の前にて善

處の生に轉ぜらるべきに。汝死して後は我身のさはぐり（金）護世を過べき嗜み計にて。汝が事をば打忘れてとぶらふ事もなし。依レ之ニ此まで迷ひ來る。佛説置給ふ妻子は後世の怨たなりとは此謂也。今此苦に代れりや否。「後略」（註）

☆「前略」其後罪人思ふ様實に俱生神の誤に非ず。加様の事と知ならば何しに罪を造るべき。夢幻の如くなる一旦の身の爲に萬劫の重苦を受ける事よと。悔れども爲せん方かたなければ盡せぬ物は泪なりけり。心に願ふ事としては哀れ娑婆の妻子眷屬が。我々菩提を訪へかしと思ふより外には更に餘の思ひもなし。げにもさこそは思らぬ。只目に見ねはこそあれ靜かに思ひやる時は身も痛む程の理也。然るに父母の事は申に不レ及。其外朝夕面を並し朋友明暮言を交へし所從等の中にも先立し者幾ぞや。其中には唯今も三途の重苦に沈ぬる人多かるべし。それを思ひやらすしてとぶらはずは情なき事なるべし。されば古人の語にも一死一生知レ交情ヲと云へり。げにも生たる時の情は互の事なれば還て我々爲なり。只なき跡のとふらひこそ實の志なれ。然るに生たる時は親しみ昵もつびて死にはつれば思ひも出さず。ましてとふらふ事なからんは更に人倫と云べき様無レ之。構へて構へて亡魂の菩提をとふらひ給ふべし。又化功歸レ己ニの道理なれば亡者をとふらふも我身の爲なり。所詮亡者の浮沈は追善の有無に依也。此等の理を思て自身も信心を催し六親をも回向あるべし。中にも閻魔王の御前にして大苦を受ける故三十五日の追善肝心也。此砌に善根をなせば悉く鏡の面にうつる時大王を始として諸の冥官等も隨喜し給也。又罪人もとふらひを受けて喜事無限。如レ此作善の多少功德の淺深を分別し。或は成佛、或は人間或は天上に送り或は又次の王へ被レ遣也。「後略」（83）

☆「前略」如レ此七日七夜を経て其後變成王の御前に參る。「中略」其時大王さればこそ汝善人ならば此道にはゆくべからず。然るを冥衆を輕しめて無罪由を偽り申條奇怪也不當也とて瞋り給へば。罪人兎角申しやる方もなし只口を閉身を促テて恐れ居る處に。孝子の善根忽に顯るれば大王是を御覽じて。此罪人には娑婆に追善あるぞや早早ゆるすべしと獄卒

共に下知し給へば。即縛繩を解て生處を善處に定められる。時に取て喜ひ譬へん方なし。餘りのうれしさに是を子供に
 知せばやと又泪をぞ浮べける。或は又其子惡事をなす時は其親彌苦を増てそれを地獄へ被遣也。故に能能亡者をとふら
 ふべき事也。凡身體髮膚を父母にうけ撫育慈受を厚く蒙る身の。親の菩提をば祈らず剩へ種種の惡業を造て亡者に苦を
 添ん事返返淺間敷事なるべし。是豈西夢が父を打^チ姉^ヒ姉^ヒが母を罵し罪に劣らんや。必しも天雷其身を割^キ靈蛇其命を吸に
 非ずとも後報何ぞ免れんや。されば孝行を先として追善を致すべし。唐に叔雄と云者は身を投て孝養を致しき。それま
 でこそなくとも信心の歩をはこび何ぞ彼菩提を祈らざらんや。孟宗が雪の中の笋^{たかぐさ}王祥が氷の上の魚是は孝の志を感ずる
 ところなり。況や孝養を致す家には梵天帝釋四大天王住し給ふと云へり。是は正しく如來の金言也誰か是を疑んや。然
 れば如^レ此輩は皆諸天の擁護を蒙る者也。但し孝養に三種あり。衣食を施すを下品とし父母の意に違はざるを中品とし功
 徳を回向するを上品とす。存生の父母にだに尙功德を回向するを上品とす況や亡親にをいてをや。雪中の笋何かせん法
 喜^{きぎ}禪^{ぜん}悅^{えつ}食^{じき}の味にはしかじ。叔雄身を投ても更に出離生死の便りにはならず。只善根を修して父母の得脱を祈るべし。仍^{なほ}
 罪人の生處定らざれば七七日の王へ被遣也。〔後略〕

☆〔前略〕若跡の追善懃^{とと}うなれば惡處の果轉じて善處に生をうく。是故に四十九日のとふらひ懃^{とと}ろに營むべし。〔後略〕⁽⁸⁵⁾

☆〔前略〕今頼む方としては娑婆の追善計也。相構て相構て追善を營み亡者の重苦を助くべし。凡一樹の陰に宿り一河の流
 をくむ事だにも多生の縁とこそ云ぬるに。ましていはんや親となり子となるをや。彼丁蘭が木をさざみしも張敷が扇を
 身にそへしも孝行の深き故ぞかし。就中外典にも父のみ尊親の義を兼たりと云て父の恩を重くせり。又母の恩不^レ淺^カ其
 故は先母の胎内に處最初柯羅邏^{から}より出胎の後に至るまで。三十八轉の間座臥不^レ安^カ母を苦しめし事幾くぞや。日を數ふれ

ば二百六十日月を計れば九月の程ぞかし。況や胎外に生じては。咽ミ苦ヲ吐キ甘ヲ廻シ乾ヲ就シ溼ニ。かゝる厚恩を蒙れば身の徒らに月日を送り居て。三途の重苦に沈みたる親の菩提を弔はざらんは淺間敷事也。争か諸天惡み給はざらんや。其上多くは子を思ふ故に地獄の重苦を受ける事あり。構へて弔ても弔べきは「親の後生菩提也。」(86)

☆「前略」一周忌都弔王本地大勢至菩薩也。「中略」此時王宣く先先の王の處よりも地獄に墮さるべけれども娑婆の追善あるに依て是まで來るなり。汝は我身を思はぬ不當の者なれども妻子孝養の善人也。此一周忌の營みに依て第三年の王へ被レ送。第三年の旅に趣く道の間の苦みも忍びがたしと見たり。同くは諸王の砌を経ずして即身成佛する様に自身も信心を取り亡者をも回向あるべし。第三年の王をば五道輪轉王と云本地釋迦如來也。罪人申様偏へに大王の御慈悲にして召人のしとになしをき給へ。處處の王の御前に召人多く見レ候誠にうらやましく候。道すがらの苦しみ量りがたし。又如何なる道にか趣き申すべく候と申す。其時大王誠に不便には思へども無理には行はざる斷罪だんざいなれば。彼等は皆其王預るべき結縁ある故也。汝は左様の縁もなければ召人の義は叶ふべからず。然れば但娑婆の追善もあらば善處に遣すべし。若又弔ふ事も無れば今より渡すへき方もなき間地獄へ遣すべし。(87)

☆「前略」頼たのまんととても頼み少きは妻子の善根也。其上没後の追善は七分が一こそ受れ。縱待得たりともうかぶほとはとぶらほじ。存命の中に悔ずして今に至て後悔すとも何の及ぶところかあらんとて。即獄地へ被レ遣也。若又追善をなし菩提を能能祈れば令シ成佛ニ或は又人天等に被レ遣也。(88)

地獄へ行きかけていたところを、追善によつて「人天等」に生まれ変わる可能性があるというのだから、追善の効用には甚しいものがあると言つてよかろう。(1)

「どこからか」によらいじゆりじゃうぼん第十六。」といふやうな語がかすかな風のやうに又句のやうに一郎に感(91)じました」というのは、だから、誰かが(父親か?)「追善をなし逆誘救助の妙法を唱へ懸」けたということではないか。

ここで問題が二つ生ずる。一は、追善という行為は死者の冥福を祈つてするものであるから、当然のことながら、当該人物の死が確定していなければならぬ。今の場合、一郎と檀夫の死を(例えば父親が)確信して追善をなしたとは考えにくい。二は、何故「によらいじゆりじゃうぼん第十六」なのかということである。(10)次節で考えてみたい。

2 「によらいじゆりじゃうぼん第十六」

a 「法蓮鈔」

鈴木健司は、書簡No.75、

此の度は御母さんをなくなされました何とも何とも御気の毒に存じます

御母さんはこの大なる心の空間の何の方向に御去りになったか私は存じません

あなたも今は御訳りにならない あ、けれどもあなたは御母さんがどこに行かれたのか又は全く無くおなりになったのか或はどちらでもないか至心に御求めになるのでせう。

あなたは自らの手でかの赤い経巻の如来寿量品を御書きになって御母さんの前に御供へなさい。

あなたの書くのはお母様の書かれると全じだと日蓮大菩薩が云はれました。

あなたのお書きになる一一の経の文字は不可思議[†]の神力を以て母様の苦を救ひもし暗い処を行かれ、ば光となり若し火の中に居られ、ば（あ、この仮定は偽に違ひありませんが）水となり、或は金色三十二相を備して説法なさるのです。あなたは御母さんの棺の前で自分一人の悟りを求めてはいけません。

心は勿論円周でもなければ直線でもないでせう。
今夜はきつと雑誌*を作つて御送りします

大正七年六月二十六日

宮澤賢治

保阪嘉内様⁽⁹³⁾

と「日蓮の「上野尼御前返事」（弘安四年十一月）との深い関わりを」次のように「指摘⁽⁹⁴⁾」た。

この書簡で賢治が嘉内に訴えていることを簡単にまとめると、母親の仏界への往生のために法華経の如来寿量品を書き写しなさい、それは日蓮が保証している、ということである。つまり、賢治は日蓮遺文の何かに基づいて嘉内に写経を勧めているわけで、私見によれば、「上野尼御前返事」「工藤注：「上野尼御前返事」の間違ひ」（弘安四年十一月）がそれに当たるのではないかと考えている。この日蓮の上野尼御前宛の書簡は、尼御前の質問―「自分の父、故松野六郎左衛門の忌日にあたって、子息たちの孝養の仕方はまちまちであるが、法華経による孝養でなければ謗法となるのであろうか」―の返答として書かれたものである。日蓮は烏龍・遺龍という漢土の書家親子の故事を引き、法華経の題目の書写がいかに亡き人への功德になるか、地獄から仏界への往生に力あるか、を説いている。以下、賢治の嘉内宛書簡と直接関連のあると見られる箇所を引用する。

我は是父の烏龍也。我レ人間にありし時外典を執し仏法をかたきとし。殊に法華經に敵をなしまいらせ故に無間に墮つ。日日に舌をぬかるる事數百度或は死し或は生き天に仰ぎ地に伏してなげけども叶フ事なし。人間へ告ケんと思へども便りなし。汝我子として遺言なりと申せしかば其言炎となつて身を責メ劍と成つて天より雨下る。汝が不孝極り無りしかども我遺言を違へざりし故に自業自得果うらみがたかりし所に。金色の仏一体無間地獄に出現して仮使遍法界斷善諸衆生一聞法華經決定成菩提ト云云。此仏無間地獄に入り給しかば大水を大火になげたるが如し。少し苦ミやみぬる処に我合掌して仏に問ヒ奉りて何なる仏ぞと申せば。仏答へて我は是汝が子息遺龍が只今書くところの法華經の題目六十四字の内の妙の一字也と言ふ。八卷の題目は八八六十四の満月と成り給へば無間地獄の大闇即大明となりし上。無間地獄は当位即妙不改本位と申して常寂光の都と成りぬ。我及罪人とは皆蓮の上の仏と成りて。只今都率の内院へ上り参り候が先ツ汝に告ぐる也と云云。遺龍カ云ク我手にて書キけり争テか君たすかり給フべき。而カも我が心よりかくに非ずいかにかいと申せば。父答テ云ク汝はかなし汝が手は我手也汝が身は我身也汝カ書キし字は我が書キし字也。汝心に信ぜざれども手に書ク故に既にたすかりぬ。譬ば少兒の火を放つに心あらざれども物を焼クが如し。法華經も亦かくの如し。存外に信を成せば必仏になる。又其義を知りて謗ずる事無れ。但し在家の事なればいひしこと故大罪なれども懺悔しやすしと云云。此事を大王に申す。大王の言ク我願既にしるし有りとして遺龍彌朝恩を蒙り國又こそぞつて此御經を仰ぎ奉る。然るに故五郎殿と入道殿とは尼御前の父也子也。尼御前は彼入道殿のむすめ也。今こそ入道殿は都率の内院へ参り給つらめ。此由をはうき(伯耆)殿読ミ聞せまいらせ候へ。事忽にて委しく申さず候。

(加藤文雅編『日蓮聖人御遺文』靈良閣藏版 初版明37 昭和6訂正12版所見)

賢治の嘉内宛書簡とこの日蓮の「上野尼御前返事」が、共に、亡き父や母に対する供養としての法華經書写の意義を訴えたものであることは、一読すれば了解できると思う。細かく対応箇所を示してみると、「あなたの書くのはお母様の書かれると同じだ」は「汝カ書キシ字は我が書キシ字也」に、「一一の經の文字は金色三十二相を備して」は「金色の仏一体無間地獄に出現して」我は法華經の題目六十四字の内の妙の一字也」に、「若し火の中に居られ、ば水となり」は「大水を大火になげたるが如し」にと、賢治はほぼ日蓮遺文通りに書き記していることが分かる〔後略〕⁽⁹⁶⁾

ほぼ首肯できる見解であるが、この遺文に述べられているのは（鈴木健司の言う通り）「法華經の題目の書写」の「功德」についてであつて、「如来寿量品」のそれについてではない。遺文中に「如来寿量品」の文字は見えないので、他でもない「如来寿量品」を御書きになつて御母さんの前に御供へなさい」と賢治が書いたということに関しては、この遺文だけを根拠として説明するのは困難であろう。実は、この「烏龍・遺龍」という漢土の書家親子の故事は、別の遺文「法蓮鈔」中にも述べられているのである。引用してみよう。

〔前略〕彼諷誦云、從慈父閉眼之朝、至第十三之忘辰、於釋迦如來之御前、自奉讀誦、自我偈一卷、回向聖靈等云云。當時日本國の人佛法を信じたるやうには見へて候へども、古へいまだ佛法のわたらざりし時は佛と申す事も法と申す事も知らず候しを。守屋と上宮太子と合戦の後信する人もあり又不信せもあり。漢土も如此摩騰漢土に入つて後道士と諍論あり道士まけしかば。始て信する人もありしかども不信の人多し。されば烏龍と申せし能書は手跡の上手なりしかば人用之。然れども於佛經いかなる依怙ありしかども不書。最後臨終の時子息遺龍を召云、汝我家に生れて藝能をつぐ。我孝養には佛經を書べからず殊に法華經を書事なかれ。我本師の老子は天尊なり天に二日なし。而に彼經に唯我一人と説きくわい（奇世第一なり。若遺言を違へて書程ならば忽に惡靈となりて命を斷べしと云て。舌八つにさけて

頭へ七分に破五根より血を吐て死し畢ぬ。されども其子善惡を辨へざれば我父の謗法のゆへに惡相現じて阿鼻地獄に墮たりともしらず。遺言にまかせて佛經を書き事なし況や口に誦する事あらんをや。かく過き行々程に時の王を司馬氏と號し奉る。御佛事のありしに書寫の經あるべしとて。漢土第一の能書を尋らるるに遺龍に定りぬ。召して仰せ付らるるに再三辭退申せしかば。力及ばずして佗筆にて一部の經を書せられけるが。帝王心よからず尙遺龍を召して仰せに云々汝親の遺言とて不し書か朕の經事雖無其謂且免之。但題目計りは書べしと三度敕定あり遺龍猶辭退申す。大王龍顔心よからずして云々天地尙ホ王の進退也。然ば汝が親は即我家人にあらずや。私をもて公事を輕ずる事あるべからず。題目計りは書べし若不然者佛事の庭なりといへども速に汝が頭を刎べしとありければ。題目計り書けり所謂妙法蓮華經卷第一乃至卷第八等云云。其暮に私宅に歸りて歎云々我親の遺言を背き王救術なき故に佛經を書きて不孝の者となりぬ。天神も地祇も定て瞋り不孝の者とねほすらんとて寢る。夜の夢中に大光明出現せり。朝日の照すかと思へば天人一人庭上に立給へり又無量の眷屬あり。此天人の頂上の虚空に佛六十四佛まします。遺龍合掌して問云々如何なる天人や答云々我は是汝が父の烏龍なり。謗佛法故に舌八にさけ五根より血を出し頭へ七分に破れて無間地獄に墮ぬ。彼の臨終の大苦をころ堪忍すべしともねほへざりしに。無間の苦は尙百千億倍なり。人間にして鈍力をもて爪をはなち鋸をもて頸をさられ。炭火の上を歩ばせ棘にこめ籠られなんどせし人の苦を。此苦にたとへばかずならず。如何してか我子に告んと思しきどもかなはず。臨終の時汝を誡て佛經を書きことなかれと遺言せし事のくやしき申さばかりなし。後悔先にたたず我身を恨み舌をせめしかどもかひなかりしに。昨日の朝より法華經の始の妙の一字無間地獄のかなへ(無)の上に飛來て變じて金色釋迦佛となる。此佛三十二相を具し面貌滿月の如し。大音聲を出して説云々假使遍法界斷善諸衆生一聞法華經決定成菩提云云。此文字の中より大雨降りて無間地獄の炎をけす閻魔王は冠をかたぶけて敬ひ獄卒は杖をすてて立てり。一切の罪人はいかなる事かとあはて(周章)たり。又法の一字來れり如前、又蓮又華又經如前此六十四字來て六十四佛となり

ぬ。無間地獄に佛六十四體ましませば日月の六十四カ天カに出たがるがごとし。天より甘露をくだして罪人に與ふ。抑レ此等の大善は何なる事ヲと罪人等佛に問ヒ奉リしかば。六十四ヲ佛ニ答ニ云ク我等が金色の身は栴檀寶山よりも出現せず。是は無間地獄にある烏龍が子の遺龍が書カる法華經八卷の題目八八六十四の文字なり。彼遺龍が手は烏龍が生ツめる處の身分也。書カける文字は烏龍が書クにてあるなりと説キ給シしかば。無間地獄の罪人等は我等も娑婆にありし時は。子もあり婦ツメもあり眷屬もありきいかにとぶらはぬやらん。又訪へども善根の用の弱シして來らぬやらんと歎クども歎クども甲斐なし。或は一日二日一年二年半劫一劫になりぬるに。かゝる善知識にあひ奉テて助ケられぬるとて。我等も眷屬となりて忉利天にのぼるか。先ッ汝をれがマ種ニんとて來ルなりとかたりしかば。夢の中にうれしき身にあまりぬ。別レて後又いつの世にか見んと思ヒし親のすがたをも見奉り佛をも拜し奉りぬ。六十四佛の物語に云ク我等は別の主なし。汝は我等が檀那なり今日よりは汝を親と守護すべし汝をこたる事なかれ。一期の後は必來ツて都率の内院へ導ケべしと御約束ありしかば。遺龍コとに畏レて誓ヒて云ク今日以後不レ可ク書ニ外典文字ヲ等云云。彼世親菩薩が小乘經を誦せじと誓ヒ。日蓮が彌陀念佛を申さじと願ハせしがごとし。さて夢さめて此由を王に申す。大王の敕宣ニ云ク此佛事已に成シじぬ。此由を願文に書キ奉れとありしかば敕宣ノ如シ。さてコ漢土日本國は法華經にはならせ給ヒけれ。此狀は漢土の法華傳記に候。是書寫ハの功德なり五種法師の中には書寫は最下の功德なり。何況カニ讀誦ナんと申スは無量無邊の功德なり。〔後略ハ〕

書簡との「深い関わり」という点から、二つの遺文を比較してみよう。「あなたの書くのはお母様の書かれるのと全じだ」に対応する箇所を「法蓮鈔」から敢えて探せば、「彼遺龍が手は烏龍が生ツめる處の身分也。書カける文字は烏龍が書クにてあるなり」ということになるが、ここは、鈴木健司の指摘通り、「上野尼御前御返事」中の「汝カ書キし字は我が書キし字也」(の方が)ピタリ当て嵌まっていると言える。しかし、「金色三十二相を備して説法なさるので

す」という部分については、「上野尼御前御返事」に、ピタリ相当する記述がない（ピタリ度不十分の相当箇所ならある）のに対して、「法蓮鈔」の方には「金色釋迦佛となる。此佛三十二相を具し面貌満月の如し。大音聲を出して説テ云ク」とあって、言葉としてよく対応している。又、鈴木健司は、「若し火の中に居られ、ば「中略」水となり」に対応する箇所として「大水を大火になげたるが如し」をあげたが、これは「如し」という言葉で明らかのように、比喩表現であつて、「一一の經の文字」が「水とな」という文字と水が直結した表現ではない。これに対して、「法蓮鈔」の方では、「此文字の中より大雨降りて無間地獄の炎をけす」とあって、文字と水との結び付きがより緊密である。書簡の表現により近いと言えよう。

更に、今の引用文の冒頭に、「彼諷誦ニ云ク從リ慈父閉眼之朝ニ至リ于第十三之忌辰ニ於テ釋迦如來之御前ニ自奉テ讀ム誦ム自我偈一卷ヲ回シ向テ聖靈ニ等云云」とあつたが、「後略」部は、次のように続いてゆく。

今の施主十三年の間毎朝讀誦せらるる自我偈の功德は唯佛與佛乃能究盡なるべし。夫法華經は一代聖教の骨髓なり自我偈は二十八品のたましひなり。三世の諸佛は壽量品を命とし十方の菩薩も自我偈を眼目とす。自我偈の功德をば私に申スべからず。次キ下に分別功德品に載セられたり。此自我偈を聽聞して佛になりたる人人の數をあげて候には。小千大千三千世界の微塵の數をころあげて候へ。其上藥王品已下の六品得道のもの自我偈の餘殘なり。涅槃經四十卷の中に集マて候し五十二類にも。自我偈の功德をころ佛は重クて説クせ給ヒしか。されば初メ寂滅道場に十方世界微塵數の大菩薩天人等雲の如くに集マりて候し。大集大品の諸聖も大日經金剛頂經等の千二百餘尊も。過去に法華經の自我偈を聽聞してありし人人。信力よはくして三五ノ塵點を經しかども。今度釋迦佛に値ヒ奉リて法華經の功德す、む故に靈山をまたずして。爾前の經經を緣として得道なると見エたり。されば十方世界の諸佛は自我偈を師として佛にならせ給フ世界の人の父母の如し。今法

華經壽量品を持つ人は諸佛の命を續ぐ人也。我得道なりし經を持つ人を捨給佛あるべしや。若比を捨給はば佛還て我身を捨給なるべし。これを以て思に田村利仁（じり）なんどの様なる兵を三千人生たらん女人あるべし。此女人を敵とせん人は

此三千人の將軍をかたきにくるにあらざや。法華經の自我偈を持つ人を敵とせんは三世諸佛を敵とするになるべし。今の法華經の文字は皆生身の佛なり。我等は肉眼なれば文字と見る也。たとへば餓鬼は恆河を火と見る人は水と見天人は甘露と見る。水は一なれども果報にしたがて見るところ各別也（各）。此法華經の文字は盲目の者は不見之。肉眼は黑色

と見る二乘は虚空と見菩薩は種種の色と見。佛種純熟せる人は佛と見奉る。されば經文ニ云、若有能持則持佛身等云云。天台ノ云、種首妙法蓮華經一帙八軸四七品六萬九千三八四。一一文文是真佛眞佛說法利衆生等と書れて候。以レ之ヲ案ニテ法蓮法師は毎朝口より金色ノ文字を出現す。此文字の數は五百十字也。一一の文字變じて日輪となり日輪變じて釋迦如來と

なり、大光明を放て大地をつきとをし三惡道無間大城を照し。乃至東西南北上方に向ては非想非非想へのぼり。いかなる處にも過去聖靈のれはすらん處まで尋行給て。彼聖靈に語り給らん。我をば誰とか思食す我は是汝が子息法蓮が每朝所誦法華經の自我偈の文字なり。此文字は汝が眼とならん耳とならん足とならん手とならんところ。ねんごろに語せ給らめ。其時過去聖靈は我子息法蓮は子にはあらず善知識なりとて。娑婆世界に向てれがませ給らん。是ころ實の孝養にては候なれ。〔後略〕

賢治が「如来壽量品をお書きになつて御母さんの前に御供へなさい」と書いたのは、この遺文を換所としたのではないだろうか。

以上のことから、賢治は「上野尼御前御返事」のみならず、「法蓮鈔」をも読んでその内容を吸収していたと推定

できるであらう。

32

b 無意識の追善、及び自我偏

もし仮に保阪嘉内が賢治の勧めに従つて「如来寿量品を」書いて「御母さんの前に」「供へ」たとしたら、それは自覚的・意志的な行為である。そうではなく、自分は追善の意志がないのに、なした行為が結果的に追善の働きをする——そのようなことがあるだろうか。先の二つの遺文に記された烏龍・遺龍の話が、その答を出してくれる。父子の問答、

「前略」遺龍云、我手にて書きけり争ふか君たすかり給ふべき。而も我が心よりかくに非ずいかにと申せば。父答云、汝はかなし汝が手は我手也汝が身は我身也汝が書し字は我が書し字也。汝心に信ぜざれども手に書故に既にたすかりぬ。譬は小兒の火を放つに心にあらざれども物を焼が如し。法華經も亦かくの如し存外に信を成せば必佛になる。

〔後略〕⁽¹⁰⁾

に明らかであろう。不信の徒が「心よりかくに非」ざるに、それは父を地獄より助け出す働きをなした。「ひかりの素足」の「によらいいじゅりやうぼん第十六」を唱えた人物が、「心に信ぜざ」る人間であったとは想定し難いし、一郎・樞夫の死を確信しての追善行為でなかったとしても、結果的に、そうであった場合と同様の効果を齎したと考えられる。無意識の追善行為としての「言葉」が、死後の苦境にいる人間を救うというこの話の展開は、場面の雰囲気・情景も含めて丸ごと「ひかりの素足」発想のヒントになったのではなからうか。

もう一つは、何故「によらいいじゅりやうぼん第十六」なのか、という問題であるが、これは先に引用した「法蓮鈔」の中に、日蓮が「自我偏の功德」を強調していることから説明できるだろう。そもそも日蓮が烏龍・遺龍の故

事を引いたのも「今の施主十三年の間毎朝讀誦せらるる自我偈の功德は唯佛與佛乃能究盡なるべ」き旨を説く為であつた。ただ、自我偈そのものは、「如来壽量品第十六」の（文字通り）「偈」の部分を目指すのだから「によらいじゆりやうばん第十六」という言葉と完全に重なるわけではない。が、日蓮自身の言として「三世の諸佛は壽量品を命として、十方の菩薩も自我偈を眼目とす」とあることから、殆ど同趣旨と考えてよからうし、又童話的修飾の要請上、ああいう表現を採つたと考えられるであらう。

三 中有から現世へ

一郎は、中有の状態から現世へ戻される。教義的に、そのようなことがあるのであろうか。「歌稿〔A〕」「歌稿〔B〕」の短歌、

（はてしらぬ世界にけしのたねほども菩薩身をすてたまはざるなし）^(A)

(A)

（はてしらぬ世界にけしのたねほども

菩薩身をすてたまはざるなし）^(B)

(B)

の典拠は、「女人成佛鈔」の次の一節、

〔前略〕觀三千大世界乃至無量有下如芥子、許非中是菩薩、捨三身命處^(B)〔後略〕

と思われるが、この文の十九行後に次の記述がある。

〔前略〕彼字に結縁せし者尙炎魔の廳より歸され六十四字を書し人は其父を天上へ送る。〔後略〕⁽¹⁴⁾

「六十四字を書し人」が遺龍のことを指すのは明らかであろう。「彼字に」云云はどういうことを意味しているのか。「善無畏鈔」で述べられている次の話を指していると思われる。

〔前略〕〔工藤注・善無畏三藏は〕如レ此いみじき人なれども一時に頓死有リ幾。蘇生天語云ク我死津流時獄卒來リ天鐵ノ繩七筋付テ鐵ノ杖於以天散散仁さいなみ閻魔宮仁到リ仁幾。八萬聖教一字一句毛不レ覺唯法華經乃題名許リ不レ覺忘。題名於思仁鐵ノ繩少幾許怒息續天高聲仁唱ヘ天云ク。今此三界皆是我有其中衆生悉是吾子而今此處多諸患難唯我一人能爲救護等云云。七ッ乃鐵ノ繩切レ碎テ十方に散ス閻魔冠を傾テ天南庭ニ下リ向ヒ給幾。今度は命不レ盡キ土天被レ歸サ也土語リ給幾。〔後略〕⁽¹⁵⁾

閻魔王は「十王讚歎鈔」にも登場していたが、『普及版 本化聖典大辭林 上卷』の「えんまのちよーてー（閻魔ノ廳庭）」の項に、

〔前略〕閻魔王が、主としては三惡道に墮つべきもの、乃至は善惡兩業定めがたきものを裁斷し教誨するがゆゑに、法庭に比してその場處を斯く名く。⁽¹⁶⁾

と説かれていることから分るように、善無畏三藏は、地獄の一步手前（＝中有）で生還したということであろう。しかも、その生還が「歸され」と受身表現になっている所も、「も一度あのもとの世界に歸」された一郎の場合と共通していると言えよう。⁽¹⁷⁾

以上で、「中有と追善」というメイン・テーマに関する論述は終わりである。次章では、その他の気付いた事を補説として述べておく。

四 皆救われたこと等

一、「「ひかりの素足」で注目されるのは、救われたのは一郎ひとりではなく、樞夫もその他の子供らでもある」(分銅淳作)という点である。これは何に基づいているのであろうか。烏龍・遺龍の故事を思い出してみよう。「六十四字を書し人は其父を天上へ送」ったわけだが、「送」ったのは父だけではなかった。父と一緒にいた、妻子等の追善を空しく待ち暮らしていたところの罪人達も、「かゝる善知識にあひ奉って助々られ」「眷屬となりて忉利天にのほ」って行つたのであつた。発想の淵源を、これに見ることができるとはないだろうか。

二、★ その人はしづかにみんなを見まはしました。

「みんなひどく傷を受けてゐる。それはおまへたちが自分で自分を傷つけたのだぞ。けれどもそれも何でもない、その人は大きなまっ白な手で樞夫の頭をなでました。樞夫も一郎もその手のかすかにほうの花のほひのするのを聞きました。そしてみんなのからだの傷はすっかり癒つてゐたのです。」^(四)

——線部と~~~~線部が因果関係にあるのかないのかハッキリ分らぬが、「法蓮鈔」に次のような記述がある。ヒントになつたかも知れない

「前略」提婆には三十相あり二相かけたり所謂白毫と千輻輪と也。佛に二相劣たりしかば弟子等輕ヲ思とぬべしとて。螢火をあつめて眉間について白毫と云ひ千輻輪には鍛冶に菊形をつくらせて足に付て行ふほどに足焼て大事になり結句死せんとせしかば佛に申す。佛御手を以てなで給ししかば苦痛さりき。「後略」

ただ、右は、「頭をなで」るのとは違ふ。頭をなでるといふ表現は、法華經に出てくる。「普賢菩薩勸發品第二十 八」の中、

若受持し、讀誦し、正憶念し、其の義趣を解し、説の如く修行すること有らん。當に知るべし。是の人は、普賢の行を行ずるなり。無量無邊の諸佛の所に於いて、深く善根を種ゑたるなり。者の如來の手をもつて、其の頭を摩でらるるとを爲ん。「後略」

(傍注省略、以下同様)

普賢、若是の法華經を受持し、讀誦し、正憶念し、修習し、書寫すること有らん者は、當に知るべし。是の人は、則ち釋迦牟尼佛を見たてまつるなり。佛口より此の經典を聞くが如し。當に知るべし。是の人は、釋迦牟尼佛を供養するなり。當に知るべし。是の人は、佛善い哉と讃む。當に知るべし。是の人は、釋迦牟尼佛の手をもつて、其の頭を摩づることを爲ん。當に知るべし。是の人は、釋迦牟尼佛の衣に覆はるることを爲ん。

又、勸發品を受けるとされる普賢經にも次のように出てくる。

「前略」既に十方の佛を見たてまつり已りて夢むらく。象の頭上に一りの金剛人有りて、金剛杵を以て、徧く六根に擬す。六根に擬し已らば、普賢菩薩、行者の爲に六根清淨、懺悔の法を説かん。是の如く懺悔すること、一日より七日

に至らん。諸佛現前三昧の力を以ての故に、普賢菩薩の説法莊嚴力の故に、耳漸漸に障外の聲を聞き、眼漸漸に障外
 事を見、鼻漸漸に障外の香を聞かん。廣く説くこと妙法華經の如し。是の六根清淨を得已りて、身心歡喜して諸の惡
 想無からん。心是の法に純らにして法と相應せん。復更に百千萬億の旋陀羅尼を得、復更に廣く百千萬億、無量の諸佛
 を見たてまつらん。是の諸の世尊、各右の手を申べて行者の頭を摩でて、而も是の言葉を作したまはん。「善い故善い
 故、大乘を行ずる者、大莊嚴心を發せる者、大乘を念する者なり。我等、昔日菩提心を發せし時、皆亦汝の如し。慙
 慙にして失はざれ。我等先世に、大乘を行ぜしが故に、今、清淨正偏知の身と成れり。汝今、亦當に勤修して懈らざ
 るべし。此の大乗經典は、諸佛の寶藏なり。十方三世の諸佛の眼目なり。三世の諸の如來を出生するの種なり。此の
 經を持つ者は、即ち佛身を持ち、即ち佛事を行ずるなり。當に知るべし。是の人は、即ち諸佛の所使なり。諸佛世尊の
 衣に覆はれたてまつる。諸佛如來の眞實の法子なり。汝大乘を行じて、法種を斷たざれ、汝今諦かに、東方の諸佛を
 觀じたてまつれ。」是の語を説きたまふ時、行者、即ち東方の一切無量の世界を見る。地の平かなること掌の如し。諸
 の堆阜、丘陵、荆棘無く、瑠璃を地と爲し、黃金間側す。十方の世思も亦復是の如し。是の地を見已りて、即ち寶樹を
 見ん。寶樹は高妙にして五千由旬なり。其の樹は常に黃金、白銀を出して、七寶莊嚴せり。〔後略〕(注の番号省略)

線部①がそうであるが、——線部②は、

★ その人は一郎に云ひました。

「お前も一度あのもとの世界に帰るのだ。お前はすなほない、子供だ。よくあの棘の野原で弟を棄てなかつた。あの
 時やぶれたお前の足はいまはもうはだして悪い劍の林を行くことができるぞ。今の心持を決して離れるな。お前の国に
 はこ、から沢山の人たちが行つてゐる。よく探してほんたうの道を習へ。」その人は一郎の頭を撫でました。〔後略〕

の——線部と似ていないだろうか。——線部③は、変化した後のその「国」の情景を描くヒントの一つになったかも知れない。^(v)

三、「法蓮鈔」中の、「此文字の中より大雨降りて無間地獄の炎をけす閻魔王は冠をかたぶけて敬ひ獄卒は杖をすてて立てり」という箇所の後半部と、「さつきまであんなに恐ろしく見えた鬼どもがいまはみなすなほにその大きな手を合せ首を低く垂れてみんなのうしろに立ってるたのです」⁽¹⁰⁾と、雰囲気似ていないだろうか。

四、同じく「法蓮鈔」の右の箇所より四つ目の文、「天より甘露をくだして罪人に與ふ」の「甘露」は「チョコレート」⁽¹¹⁾（★）に相当しよう。

五、「善無畏鈔」中の次の文も、「ひかりの素足」の一節を思い起こさせる。

〔前略〕題名於思仁鐵ノ繩少シ幾許ゆるり、いびつ、い怒息いびつ、い續いびつ、い天高聲仁唱あま天云々。今此三界皆是我有其中衆生悉是吾子而今此處多諸患難唯我一人能爲救護等云云。セツ乃鐵ノ繩切レ碎テ十方に散テ閻魔冠を傾テ天南庭ニ下リ向テ給幾。〔後略〕

★〔前略〕一郎はどこからか「によらいじゅりやうぼん第十六。」といふやうな語がかすかな風のやうに又句のやうに一郎に感じました。すると何だかまはりがほつと楽になつたやうに思つて

「によらいじゅりやうぼん」と繰り返してつぶやいてみました。すると前の方を行く鬼が立ちどまって不思議さうに一郎をふりかへつて見ました。〔後略〕⁽¹²⁾

特に、「題名於思仁鐵繩少シ幾許怒」の呼吸と、「すると何だかまはりかほつと楽になつたやうに思つて」とが似ている。又、一郎自身が「によらいじゅりやうぼん。」と繰り返してつぶやいたことは追善行為とは言えぬわけだが、

善無畏三藏自身が「今此三界」の文を「唱へたことと対応しよう。

おわりに

「光のすあし」⁽¹⁸⁾の人は誰か。確定的な意見に辿り着くことができていない。「に、よ、ら、い、じ、ゆ、り、や、う、ぼ、ん、第、十、六」という言葉、及び「法蓮鈔」の「妙の一字」「中略」變じて金色、釋迦佛となる」「一一の文字變じて日輪となり日輪變じて釋迦如來となり」からすると釈迦仏（如來）と考えてもよさそうであるが、よく分らない。分らないのは、白く光るということと「すあし」ということの意味を追究し切れていないからである。宿題としておきたい。

「うすあかりの国」が地獄でなく中有であるということは、ほぼ証し得たと思うが、そうだとしても、何故一郎達が苦しい目に合わなければならぬのか（そういう風に書いたのか）という読者（として）の疑問は消えない。日蓮遺文に忠実であろうとした結果か、それとも一郎達は救済の場面を強調する為の犠牲者であろうか（「迎意的」⁽¹⁹⁾とは、この間の消息を自知していたことを示す言葉であろうか）。もう一つ、追善によって救われたということと、一郎が「棘の野原で弟を棄てなかった」⁽²⁰⁾こと（によって救われたように読める）とが、うまく噛み合っていないように思われる。「凝集を要す」⁽²¹⁾という言葉は、この辺の事情を指すものであったろうか。

〔注〕

(a) 統橋達雄は「ひかりの素足」は、「中略」罪を背負う人間が鬼に苛まれる地獄界（刀葉林地獄？）から、如來寿量品（法華経）のうすあかりの国への幻想を語りつづける」と、「地獄界」と「うすあかりの国」を別物のように

(b) 書いているが、これは続橋達雄の勘違いであろう。
山根知子に次のような見解がある。

しかしながら、「一、小山屋」「二、峠」で描かれている仲の良い思いやりのある無邪気な兄弟、一郎や権夫のような子供のいったどこに罪を問おうというのか、と考えると疑問を生ずるかもしれないが、この罪は、かえつてそんな無邪気な子どもを対象に言われるからこそ、人間が無意識的にもつ根源的な罪である「原罪」を表していると言えるのではなからうか。作者賢治が意識の深みに潜入する深層体験の中で感じていた人間存在の奥深くに潜む罪の実相が、生と死の狭間をさまよう深層体験を描くなかで表出されたと言えるのではなからうか。(なお、兄としての一郎の個人的な罪の意識も考えられるが、それについては次章で考察する)

要するに、日常の表層意識から解き放たれない潜在意識の中にある自我の心の曇りが、真理や平安の世界を見ることを妨げ、自分にとってそれは苦悩の世界であると見る。そして、それによって自分は他から傷つけられ苦しめられていると意識し錯覚してしまう。これが、潜在意識のなかに巣くう人間の原罪の実体なのだという考えが込められているのではなからうか。⁽⁴⁾

右の「註」(8)とは次の如し。

(8) 分銅惇作氏はこの鬼の言葉を「子供といえども免れがたい前世からの先業思想を表現したもの」(註(2))ととらえているが、私は作品の構造と意識の深層との関わりから本論のようにとらえたい。⁽⁵⁾

(c) 右の「註(2)」の内容は、「解釈と鑑賞」昭59・11⁽⁶⁾である(後出の注(118)参照)。
大塚常樹は、次のように述べている。

「青森挽歌」のモチーフの発展形で、「銀河鉄道の夜」と双子関係にあると言ってもよい「ひかりの素足」では、雪の峠で凍死した兄弟の兄(一郎)が見た、幻想的な二つの《異界》(鬼の世界と天の世界)が描かれている。その初めの《鬼》の住む世界では、子供達が瑪瑙のかけらでできた地面を歩かされて足が切れるが、

《鬼》達は鞭でたたいて無理に歩かせるのである。これが《地獄》なのか《餓鬼道》なのかは明確にはしえないが、どちらかであることは明白である〔後略〕¹³⁾

何故「どちらかであることは明白である」のかは記されていない（「明白」だから記す必要がないということであろうが）が（大塚常樹の）文脈に沿って考えるならば、「三悪道（畜生、餓鬼、地獄）の内、畜生に転生してはいないのだから、残る「餓鬼」か「地獄」の「どちらかであることは明白である」ということであろうか、それとも——右の引用文は、大塚常樹が初出稿を「手直し」し「加筆」した箇所と思われるが、この「加筆」の背景に、通説に加えての五十嵐茂雄新説の撰取という過程があったのであろうか。

(d) 念の為に、中村元『佛教語大辞典縮刷版』、「餓鬼」の項より引用しておく。

「前略」六道の一つの餓鬼道に住む者。悪業の報いとして餓鬼道に墮ちた亡者。飢渴に苦しむ者。福德のない者が陥り、常に飢え・渴き・苦しみに悩まされてたまたま食物を得ても、これを食べようとすると、炎が發して食べることができないといわれる。〔後略〕²¹⁾

(e) 但し、「うすあかりの国」はしだいに地獄の様相を呈し始める²³⁾ という記述もある。

(f) 田口昭典の書いている次の箇所も、意味がよく汲み取り難い。

賢治が追求した「生と死」、そして、その中間の領域を「うすあかりの国」とするか「幻想四次」の世界とするか、あるいは「中有」の世界とするか、その見方はいろいろ異なっている。実は賢治の心象の中には、いつでも存在し、自由に入りのできるいわゆるドリームランドではなかったか、そして賢治の童話作品の中で繰り返し描かれ、最終的には「銀河鉄道の夜」に昇華していったのではないだろうか³⁰⁾。

「うすあかりの国」と「中有」の世界」とは別物なのか。又、「うすあかりの国」・「幻想第四次」は賢治自身の表現であって、「中有」の世界」というのは読者の解釈だから、次元が違おう。

(g) 龍谷大學編『佛教大辞典 第三卷』、「ジウオウ 十王」の項中に、「極善と極悪とは中有なくして直ちに惡趣又は善趣に入る³¹⁾」という一節がある。だから、百パーセント中有の状態へ移るわけではないが、一郎達がたとえ過

去世に於ても「極悪」の罪を犯していたとは考えにくいのではなからうか。

(h) 『日蓮聖人御遺文』に於て、「十王讚歎鈔」の次に「八大地獄鈔」が置かれている。すぐ隣に地獄に関する参考文献があるのに、何故、わざわざ離れた所（順番で言えば三十九番目、頁数で言えば三七六頁も離れている）にある「顯誦法鈔」を利用せねばならぬのかという疑問が出るかも知れない。「顯誦法鈔」というのは、標題だけ見ていると、中に地獄のことが書いてあるとは、必ずしも予測がつくまい。賢治は、寧ろ「誦法」について知りたいたいと思つてこの遺文を継いだのではなかつたか。すると凶らずも中に地獄についての記述があつた。それを後で、「ひかりの素足」執筆の時に思い出して、○印を付けたのではなからうか。「十王讚歎鈔」の方も、標題から中味を推し量ることは無理である。賢治が中有についての知識を得ようとして、例えば『本化聖典大辭林下』（書名は背文字による）の「ちゅうのたび（中有ノ旅）」の項を読んだとしたら、「十王讚歎鈔」等に出つ」という冒頭の一文が目に見え込んで来たに違いない。かくして「十王讚歎鈔」を繙くに至り、「十王讚歎鈔」を読めば、すぐ次に、「八大地獄鈔」があるのに気付いた筈だから、当然それも読んだことは考えられる——と、以上、起り得たであろうケースを想像してみた次第である。

なお、賢治が「十王讚歎鈔」を確かに読んでいた証拠として、次の事実がある。「賢治所蔵本の『日蓮聖人御遺文』末尾の「御遺文類聚索引目次」の中に、賢治が新たな項目・頁数を書き加えている箇所がある」その一番最初に「○高祖大悲 五四」と見えるが、五四頁とは、「十王讚歎鈔」の始まる頁なのである（「十王讚歎鈔」は五四頁の第一行目から始まつていて、五四頁に他の遺文は印刷されていない）。

(i) 「巖」石は出て来ないが、身体が微塵に打ち砕かれては生き返る表現箇所として、他に次のものがある。

☆「前略」汝憚なく惡業を作りながら憲法の裁断をあざむき疑ひ呻ふ條罪科これ重とて。鐵の棒を以て百度千度五體を打に。身體手足破れ摧る事微塵の如くにして死す。業報なれば又活かへる活かれへば又打摧也
〔後略〕

☆「前略」獄卒又髪をつかんで頭を引上鏡にさしつけ。それ見よそれ見よと責るのみに非ず棒を以て打叩けば。始は音を擧て叫べとも後には息も絶はてて微塵の如く打摧かる。又活活と云てなでさすれば又人と成て受⁶⁵苦⁶⁶〔後略〕

(j) 勿論、「自業自得」という考えは、「十王讚歎鈔」の専売特許ではない。「報恩鈔」の中に、「すく(救)はんとをばせども自業自得果のへん(邊)はすくひがたし」、「上野尼御前御返事」の中に、「自業自得果うらみがたかりし所に」とある。更に、これが、仏教一般の考えであることも、言う迄もなからう。ただ、中有の状態に於てもそれが言われているのを見て、作品に取り入れたということであろう(先の二例は、地獄に墮ちたことに關して言われた言葉である)。

(k) 「後略」部は、次のように続いてゆく。「不便なれども自業自得の理りなれば力不_レ及。凡今までの苦みは地獄の苦に並ぶれば大海の一滴の如し。汝彼地獄の苦を受ん時は如何すべきや。地獄の有様あらあら語て聞すべし」。以下、「地獄の有様」が述べられてゆくのであるが、今の記述に明らかのように、中有での苦しみと地獄におけるそれとは、比数にならないということが分るのである。

(l) 「上野殿後家尼御前御返事」(本文標題は「上野殿後家尼御返事」となっているが、「高祖遺文録對照目錄」及び柱の名称に従った)中に、次の記述がある。

「前略」故聖靈は此經の行者なれば即身成佛疑_レなし。さのみなげき給_レべからず。又なげき給_レべきが凡夫のことわりなり。ただし聖人の上にもこれあるなり。釋迦佛御入滅のとき諸大弟子等のさとり(悟)のなげき。夫のふるまひ(振舞)を示し給_レか。いかにもいかにも追善供養を心のよぶほどはげみ給_レべし。古徳のことばにも心地を九識にもち修行をば六識にせよとをしへ給_レことわりにもや候らん。「後略」

「即身成佛疑_レなし」の場合でも「追善供養」を勧めているのだから、「追善供養」がいかに大切かということである。

(m) 西山令子に次の説がある。

「によらいじゆりやうぼん第十六」は『法華經』の本門の最肝要の經典「如来壽量品第十六」で、釈迦の寿命が久遠であることを説明したもので、その偈は「自我偈」とか「久遠偈」と呼ばれて最も盛んに読誦されている。日蓮言「凡八万法藏の広きも、一部八卷の多きも、只是五字を説いたため也」や、賢治がそれを常に読誦していたことを考察する時『妙法蓮華經』と同義語とみなしうるであろう。言葉には神秘な力がこもつ

ているという思想は世界中にあるので唱題が仏性を呼びあらわす力をもつという設定に不自然さはないが「南無妙法蓮華經」が「オンアピラウンケンソワカ」や「南無阿弥陀仏」などと共に呪文として用いられていることが周知の事実であるため、陳腐とみなされても仕方なからう。

(n) 「まいらせ」の次に「し」の字が脱落している。以下、字体の新旧、ルビの有無、片カナの送り仮名が右寄りの小文字であること、「(伯耆)」がポイント落ち右寄りであること以外の、誤植と思われる箇所は次の通りである。天に仰ぎ↓天に仰き、入り給しかば↓入り給しかば、八八六十四の満月↓八八六十四の佛六十四の満月、心あらざれども↓心にあらざれども、事忽にて↓事忽忽にて、靈良閣↓靈良閣(95)なお、のちの鈴木健司『宮沢賢治 幻想空間の構造』(注(94)に既出)七二―七三頁では、「八八六十四の佛」の「の」が脱落している他は、「誤植」は正しく直されている。

(o) 鈴木健司に、次のように「十王讚歎鈔」への言及がある。

例えば、日蓮の書簡には、身内の死に悲しむ信者に向かって、死者の赴く場所として《靈山浄土》をたびたび説いているが、賢治にとつてこの《靈山浄土》という他界観はなぐさめにならなかつたのだろうか。また、日蓮の輪廻思想がうかがわれる「十王讚歎鈔」などには法華經供養による成仏や天界への生まれ変わりが説かれ、賢治が納得したか否かは別として、賢治にとつて理論的には日蓮教学からと子の転生問題を追うことができたはずであり、やはり検証すべき事柄のように思う。

(p) 龍佳花は、「保阪が母を亡くした際には日蓮遺文より法蓮抄(96)を引くこと三度に及んでいる(大正七年四月十八日・五月十九日・六月二十六日の書簡)」と述べているが、引用箇所的具体的指摘はない。なお、「保阪は『工藤注…大正七年』六月一六日に母を亡くした」(97)由だから、三つの書簡の内、初めの二つは(日付から言つて)保阪嘉内の母の死とは無関係であらう。

(q) 西山令子に、

皆が地獄と思つていたそこが浄土に急変するのは「見宝塔品」の娑婆世界の変貌に関する「即變清淨。瑠璃為地。宝樹莊嚴……」、沢山の国々の変貌「皆令清淨。無有地獄。餓鬼。畜生。及阿修羅。」や日蓮の「一

生成仏信心鈔」の「衆生の心けがられば土もけがれ、心清ければ土も清しとて淨土と云ひ穢土と云も土に二の隔なし只我等が心の善悪によると見えたり」、「曾谷入道殿御返事」の「此經の文字は、皆悉く生身妙覺の御仏なり。然れど我等は肉眼なれば文字と見るなり。例せば餓鬼は恒河を火と見る。人は水と見る。天人は甘露と見る。水は一なれども、果報に随つて別々なり。」が参考にならう。(ママは西山)

という指摘があり、池上雄三が(西山令子の指摘の内の)最後の「曾谷入道殿御返事」からの引用文に触れて、「賢治の講義を記録したノートにも、このような言葉がある〔工藤注…『校本全集』第十四卷(昭52・10・30)七七四頁参照〕と補足しているが、「法蓮鈔」にも同様の文言のあることを指摘しておきたい。なお、曾谷入道と法蓮とは同一人物である。念の為。

(r) この「一一文文是真佛真佛説法利衆生」の文句は、大正七年六月二十六日付保阪嘉内宛書簡(No.75)と程近い時期、四月十八日に書かれた成瀬金太郎宛書簡(No.55)の中に、引用符(カギカッコ)付きで出て来る(但し、「一一文々、是真仏、真仏説法利衆生」と僅かに違っているが)。この書簡(No.55)は、龍佳花の言及していたものであった(注(p)参照)。この文句及びそれに続く、「一一の文字變じて」・「大光明を放つて大地をつきとをし三惡道無間大城を照し」・「此文字は汝が眼とならん耳とならん足とならん手とならん」と、書簡No.75の「一一の經の文字は不可思議の神力を以て母様の苦を救ひもし暗い処を行かれ、ば光となり若し火の中に居られ、ば〔中略〕水となり」と、表現の発想が似ていると言えぬだろうか。なお、伊藤雅子に、

また日蓮は『妙法蓮華經』の一々の文字が仏(教主釈迦如来)であると説き、さらに菩薩たちの名を挙げることもあった。いわくへ法華經の題目をつねは・となへさせ給へば此の妙の文じ御つかひに変ぜさせ給い。或は文殊師利菩薩或は普賢菩薩或は上行菩薩或は不輕菩薩等とならせ給うなり。またへ妙の文字は三十二相・八十種好・円備せさせ給う釈迦如来にておはします。妙心尼御前御返事(弘安三月五月)と。

という指摘があり、(伊藤雅子は言及していないが)この「妙心尼御前御返事」(弘安三年五月)中にも「天台大師、云、一一文文是真佛等云」と出ている。但し、見て明らかのように、後半の文句はない。

(s) 「によらいじゆりやうぼん第十六」に関して、八木公生に次の説がある。

誰がそのことばを発したのか。登場人物の誰でもないことはたしかである。では、誰が——。この疑問に答えてくれるのは、巨きな光る人の次の発言である。

「こわいことはない。おまえたちの罪は、この世界を包む大きな徳の力にくらべれば、太陽の光とあざみの棘とげのさきの小さな露のようなものだ。なんにもこわいことはない」

これは、によらいじゆりようほん」ということばの起源が、この世界を包む大きな徳の力そのものであることを示唆したものである。そして、ここには、一郎の献身的行為は、この世界を包む大きな徳の力、そのひとつのかたちである。「によらいじゆりようほん」にあずかることにおいて初めて、その十全な意義、つまり救済（蘇生）に値する価値を担い得るといふ理解があるように思う。

——線部に対して、隔靴搔痒の感を覚えるのは、「この世界を包む大きな徳の力」とは何か？その根拠は？と、更に問いたくなるからである（「光る人」の発言の中では、これは「おまえたちの罪」とその対比で用いられているので、文脈上それ以上の根拠が要請されない）。八木公生は、

「前略」イーハトヴにおける絶対的な救済者は、超越へ者」というよりはむしろ超越へそのもの、賢治自身のことばを用いれば「世界自身の発展」それ自体として把握することができよう。賢治においては、いわば「世界自身」に内在した救済力こそが信じられていたのであり、超越的な相貌をもった如来や神は、その救済力の一契機としての位置しか持っていないのである。

という見解を用意しているのであるが、賢治の発想は、もつと即物的ならぬ即仏的（＝即仏教的）なものではなかつたらうか。

(七) 「善無畏三藏鈔」にも同趣旨の話があるが、現世に戻されたことは記されていない。又、「報恩鈔」には次のようにある。

「前略」忽に頓死して二人の獄卒に鐵の繩なは七つつけられて閻魔王宮にいたりぬ。命いまだつきずといひてかへされしに。法華經諷法とやねもひけん眞言の觀念印眞言等をばなげすて。法華經の今此三界の文を唱て

繩も切かへされ給とぬ。〔後略〕

(u) もう一箇所、「時に十方の佛、各右の手を伸べて、行者の頭を摩でて、是の如きの言を作したまはん」とあり。

(v) 伊藤雅子に、普賢経への言及、及びそれに関する論述がある。又、変化した後のその「国」の情景については、西山令子・小原忠・分銅淳作・伊藤雅子等に説がある。

(1) 伊藤雅子「光のすあしは誰か」(『賢治研究』60〔平5・5・30〕二八頁)。

(2) 続橋達雄『宮沢賢治・童話の世界』(昭44・10・5 桜楓社)九〇頁。

(3) 『校本宮澤賢治全集第七卷』(昭48・5・15初版未見 昭51・6・15初版二刷所見 筑摩書房 以下同全集を『校本全集』と略記し発行所名を省略する)二八六頁。以下同書よりの引用は、頁数のみ記す。

(4) 山根知子「宮沢賢治「ひかりの素足」試論——意識の深層をめぐって——」(『國文目白』第三十一号〔平3・11・30〕一三三—一三五頁)。

(5) 同右、一三九頁。

(6) 同右、一三三—三八頁。

(7) 西山令子「ひかりの素足」考」(『児童文学研究』第12号〔81・7〕複写所見により発行日不明)一七頁。

(8) 二八六頁。

(9) 二八七頁

(10) 同右。

(11) 編輯校訂／出版願主・故加藤文雅、編輯兼發行人・祖書普及會代表加藤文雄『日蓮聖人御遺文』(明37・8・28初版未見 昭8・4・28第十四版所見 發賣所・日蓮宗傳道組合代理部)四三〇—四三七頁。以下同書を通称に従って『縮遺』と略記する。

(12) 五十嵐茂雄「ひかりの素足」の諸相」(『かながわ高校國語の研究』第二十八集)〔平4・11・4 神奈川県立岸根高等学校(内) 神奈川県高等学校教科研究会國語部会編集〕三〇頁)。

- (13) 大塚常樹「青森挽歌」論（『宮沢賢治 心象の宇宙論』（93・7・20 朝文社）二七八頁）。
- (14) 同右、二七七頁。
- (15) 大塚常樹「宮沢賢治、そのインダの生命宇宙論「春と修羅を中心に」（『宮沢賢治』第十一号（92・1・20 洋々社）（前出）大塚常樹『宮沢賢治 心象の宇宙論』三三三・三三二六頁。
- (17) 同右、三三三頁。
- (18) （前出）五十嵐茂雄「ひかりの素足」の諸相、三二頁。
- (19) 『校本全集第十二巻（下）』（昭51・5・30）三五九〜三六〇頁。
- (20) 『縮遺』一五九四〜一五九七頁。
- (21) 中村元『佛教語大辞典縮刷版』（昭56・5・20第一刷未見 昭60・6・14第五刷所見 東京書籍）一六二頁。
- (22) 島地大等『漢和妙法蓮華經』（大3・8・28初版未見 大15・10・1二十七版所見 明治書院）の「法華字解」の五頁、「餓鬼」の項。
- (23) 平尾隆弘『宮沢賢治』（78・11・20 国文社）三〇八頁。
- (24) 田口昭典『賢治童話の生と死』（昭62・6・15 洋々社）一九七〜一九八頁。
引用文中、「註」(6)の内容は「平尾隆弘 宮沢賢治（国文社）」、(7)は「龍佳花 宮沢賢治をもとめて「青森挽歌」論（洋々社）」、(8)は「仏教説話大系第二十巻 地獄と極楽（すずき出版）」（以上二四七頁）である。
- (25) 同右、一九六〜一九七頁。
- (26) 同右、二〇一頁。
- (27) （前出）五十嵐茂雄「ひかりの素足」の諸相、三〇頁。
- (28) 田口昭典「私見 宮沢賢治 生と死について（二）」（『時園』第十号（84・3・3 盛岡市山岸二丁目一五八 時園社発行）（前出）田口昭典『賢治童話の生と死』二五一頁。
- (30) 同右、二二〇頁。
- (31) 龍谷大學編『佛教大辭彙 第三巻』（大5・12・23初版発行未見 昭48・7・25再版発行所見 富山房）一八一八頁。又、『縮遺』五五頁にも同趣旨の文言がある。
- (32) 斎藤文一『宮澤賢治——四次元論の展開』（91・2・25 国文社）七五一頁。

(33) 田中智学監修『普及版 本化聖典大辭林 下巻』(書名は奥付による。大9・12・1 原本発行未見 昭63・10・12普及版
発行所見 国書刊行会) 二四二二頁。

(34) (前出)『校本全集第十二巻(下)』五四八頁。

(35) 『縮遺』54頁。以下「十王讚歎鈔」よりの引用は、アラビア数字で頁数のみ示す。

(36) 二八二頁。

(37) 55頁。

(38) 以上、59頁。

(39) 55頁。

(40) 二八七頁。

(41) 55頁。

(42) 二八五〜二八六頁。

(43) 56頁。

(44) 以上、二八二頁。

(45) 以上、二八三頁。

(46) 以上、二八四頁。

(47) 以上、二八五頁。

(48) 二八六頁。

(49) 以上、二八七頁。

(50) 以上、二八八頁。

(51) 「注文の多い料理店」(『校本全集第十一巻』(昭49・9・15初版未見 昭51・6・15初版二刷所見) 三二頁)。

(52) 以上、二八二頁。

(53) 以上、二八三頁。

(54) 以上、二八四頁。

(55) 以上、二八五頁。

- (56) 以上、二八六頁。
- (57) 以上、二八七頁。
- (58) 56頁。
- (59) 65頁、66頁。
- (60) 二八六頁。
- (61) 57頁、58頁。
- (62) 69頁。
- (63) 二八四頁、二八五頁。
- (64) 64頁。
- (65) 68頁。
- (66) 58頁。
- (67) 二八二頁。
- (68) 67頁。
- (69) 70頁。
- (70) 74頁。
- (71) 77頁。
- (72) 79頁、80頁。
- (73) 二八七頁。
- (74) 二八九頁。
- (75) 『縮遺』一五〇〇頁。
- (76) 同右、二〇七八頁。
- (77) 72頁。
- (78) 二八七頁。
- (79) 池上雄三「『ひかりの素足』」(『國文學—解釈と教材の研究—』第34卷14号〔平元・12・20〕八三頁)。

- (80) 60頁、61頁。
- (81) 62頁、63頁。
- (82) 63頁、65頁。
- (83) 68頁、69頁。
- (84) 69頁、72頁。
- (85) 73頁。
- (86) 74頁、75頁。
- (87) 76頁、77頁。
- (88) 77頁。
- (89) 80頁。
- (90) 『縮遺』一〇五二―一〇五三頁。
- (91) 二八八頁。
- (92) (前出) 西山令子「『ひかりの素足』考」、一八頁。
- (93) 『校本全集第十三卷』(昭49・12・20初版未見 昭51・6・15初版二刷所見) 八八―八九頁。
- (94) 以上、鈴木健司「とし子・転生」(前出)『宮沢賢治』第十一号二二五頁。のち鈴木健司『宮沢賢治 幻想空間の構造』(94・11・25 着丘書林)に「第3章 死後の行方 とし子・転生」と改題して収、七〇頁)。
- (95) 以上、『縮遺』二〇七八―二〇七九頁、及び背文字に拠る。
- (96) (前出) 鈴木健司「とし子・転生」(『宮沢賢治』第十一号二二六―二二七頁。『宮沢賢治 幻想空間の構造』七一―七三頁。引用は初出より)。
- (97) 同右、二二四頁。六八頁。引用は初出より。
- (98) 龍 佳花『宮沢賢治をもとめて――〈青森挽歌〉論』(85・11・30 洋々社) 一九四頁。
- (99) 堀尾青史 編著『宮沢賢治年譜』(91・2・28 筑摩書房) 九三頁。
- (100) 『縮遺』一一六〇―一一六三頁。
- (101) 同右、二〇七八―二〇七九頁。

- (102) (前出) 西山令子「『ひかりの素足』考」、一九頁。
- (103) (前出) 池上雄三「『ひかりの素足』」、八三頁。
- (104) (前出) 『校本全集第十三卷』六一頁。
- (105) (前出) 伊藤雅子「光のすあしは誰か」、二九頁。
- (106) 『縮遺』一九四七頁。
- (107) 同右、一一六三―一六六頁。
- (108) 同右、二〇七八―二〇七九頁。
- (109) 八木公生「イーハトウはユートピアか―童話にみる救済の構造―」(『仏教』no. 13〔90・10・15〕一四九頁)。なお、「本稿における宮沢賢治からの引用は、「角川文庫」所収の本文によった。なお、適宜『宮沢賢治全集』(ちくま文庫版)も参照した」(一五二頁) 由。
- (110) 同右、一五二頁。
- (111) 『校本全集第一卷』(昭48・11・15初版未見 昭51・6・15初版「刷所見」) 五九頁。
- (112) 同右、二〇七頁。
- (113) 『縮遺』五三二頁。
- (114) 同右、五三三頁。
- (115) 同右、一三四三頁。
- (116) 同右、六四五―六四七頁。
- (117) 同右、一四八八頁。
- (118) 田中智学監修『普及版 本化聖典大辭林 上巻』(書名は奥付による。大9・12・1 原本発行未見 昭63・10・12普及版発行所見 国書刊行会) 六一五頁。
- (119) 二九二頁。
- (120) 分銅淳作「『ひかりの素足』——浄土のイメージについて——」(『国文学解釈と鑑賞』第49巻13号〔昭59・11・1〕八〇頁)。なお、注(七)に出てくる「分銅淳作氏」の論文とはこれである。
- (121) 二八九頁。

- (122) 『縮遺』一一五四～一一五五頁。
- (123) (前出) 『漢和妙法蓮華經』六〇五頁。
『漢和妙法蓮華經』六〇五頁。
- (124) 同右、六〇七～六〇八頁。
同右、六〇七～六〇八頁。
- (125) 「國譯佛說觀普賢菩薩行法經」(編輯兼/發行者・國民文庫刊行會「國譯大藏經 第三册(第一、二、三)」(書名は扉による。大6・6・20 國民文庫刊行會)九～一〇頁)。
- (126) 同右、二〇頁。
- (127) 二九二頁。
- (128) 伊藤雅子「修羅の悟り「春と修羅」の主題」(前出)『宮沢賢治』第十一号一〇〇頁)、及び(前出)「光のすあしは誰か」、三〇～三三頁。
- (129) (前出)西山令子「ひかりの素足」考、一九～二〇頁。小原忠「ひかりの素足」(『賢治研究』32〔昭58・4・20〕九頁)。(前出)分銅淳作「ひかりの素足」、七八～七九頁。(前出)伊藤雅子「光のすあしは誰か」、二八頁。
- (130) 二八九頁。
- (131) 二九二頁。
- (132) 二八八頁。
- (133) 同右。
- (134) 四二九頁。
- (135) 二九二頁。
- (136) 四二九頁。